マスカーレイドに異常なし！？　第７話　特殊部隊入隊試験

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マスカーレイドに異常なし！？　第７話　特殊部隊入隊試験

【Ｎコード】
Ｎ１０５６Ｂ

【作者名】
水鏡樹

【あらすじ】
マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第７話は突然の休暇で特殊部隊の入隊試験を受けに行くシェラと、それに付き合わされるハンターが、二人の前に現れた人物から依頼を受ける。二人は無事、依頼を達成できるのか！？

その1：シェラの休暇

まだ日も昇っていない早朝に、鳴り響く扉の殴打音。
ハンターは眠そうに目をこすりながら、時計に目をやった。短針と長針がきれいに直角の形になっている。
「まったく、だれだよ。まだ朝三時だぞ……」
枕のしたからデザートイーグルを取り出し、あくびをしながら布団から身を起こす。玄関へと近づいていきながら、ノックの主へと声をかけた。
「だれだ？　しょうもない用事なら鉛弾を食らってもらうぞ」
「わたし」
「わたしなんて名前の奴は知らん。鉛弾コースだな」
「うわわわわ！　シェラだって！　鉛弾は勘弁してよ！」
ハンターは一応用心しながら、扉を開ける。確かにそこにいたのはシェラだった。
「どうしたんだこんな朝早くに。見慣れない格好して」
「あの……これ、昔だったら標準装備なんですけど」
「そうだったな。最近はエプロンばっかりだったから忘れてた」
睡眠を遮られたせいか、少しいらだった口調でハンターが嫌味を飛ばす。
確かにシェラはいつもとは違う、昔の格好だった。銀の胸当てと腰から地面すれすれまでのびるツーハンデットソード。その姿をハンターが見るのは、サイクロプスと戦って以来だった。
「で、なにか仕事か？」
「いや、ちょっと腕試しをしようと思ってさ」
「腕試し？」
聞き返すと、シェラはコックリと頷いた。
「以前ハンターが言ってたでしょ？　特殊部隊の入隊試験の話」
「ああ、したなあ。受けに行くのか？」

「うん、ちょっと一週間ばかし暇ができたんで……」
頭を掻きながら、ばつが悪そうにうつむくシェラ。
「なにかオートエーガンでやらかしたのか？」
「いや、ちょっとした出来心でアルマさんをからかったら、昨日から一週間の謹慎を言い渡されちゃってさ」
「どうりで昨日は見ないと思ったが。それにしてもアルマをからかうとは、思ってたより根性があるな」
「そんなことで感心されても、あんまり嬉しくないんだけど」
複雑な心境で頬をふくらませるシェラに、ハンターは頭をボリボリとかいてみせる。
「まあそんなことはどうでもいい。おれが言いたいのは特殊部隊の試験を受けに行くならさっさと行けばいいってことだ。おれになんの用がある」
「それがさ……」
指の先をもじもじと口の前で動かしながら、シェラはできるだけ可愛らしくつぶやいた。

その2：思いがけない依頼

「ハンターも一緒に来ない？」
「はっ？」
「わたし、王都の場所知らないの……」
「はあっ？　なんで元傭兵の……」
「元じゃないんだけど……」
「……現ウエイトレスのお前が王都――ディヴァイナルの場所を知らないんだよ。王都に行くための護衛なんてよくある話じゃないか」
ハンターの言葉は的を得ていた。王都といえばこの国で一番大きな都市であり、一番人口も多い。となると、当然行商人や輸送も王都へと向かうものが多くなる。
その途中、賊やモンスターのに遭遇したときの金品と命を守るためには、どうしても傭兵や護衛を雇う必要があった。シェリーのように一人で旅を続けている行商人など、稀有な存在なのだ。
だが、シェラは自信なさげにうつむきながら、小さく首を振っていた。
「わたし、田舎育ちだからさ。田舎のほうの仕事ばっかりだったの」
「冗談だろ？」
「本当だって。ここから北にある街にはいったことがないもの」
ハンターは頭を抱えつつ、背中を壁へと預けた。ハンターも認める傭兵が、王都に行ったことがないなど予想だにしていなかったのだ。
「それなら乗合馬車にでも乗っていけばいいだろ？　御者にでも聞けば王都へと案内してくれるさ」
「一人旅って、不安が大きいんだよね。それに確実性もないし」
「おまえなあ……」
「いいじゃんかハンター。どうせ暇なんでしょ？」
両手を合わせるシェラから、無常にもハンターは顔をそらしてい

た。
「おれはな、ディヴァイナルへは行きたくないんだよ」
「どうして？」
「それは……どうしてもだよ」
ばつが悪そうに、シェラから顔をそらす。少し考えてから、シェラはハンターの肩を叩いた。
「わかったよ。じゃあハンターを雇うってことでどう？」
「仕事の依頼ってことか」
「そう、五日間の護衛と王都への案内込みで報酬は十万バッツってとこでどう？」
両手を開いてみせるシェラに、首をふってみせるハンター。
「二十万バッツだ」
「十一万バッツ」
「十九万五千バッツ」
「えーい、十一万五千バッツ！」
「十九万三千バッツだ」
その後数分にわたる交渉の結果、結局十七万三千四百バッツということになった。
「よし、ちょっと準備をしてくるから待ってろ」
「オッケー。外で待ってるから」
そう言うとシェラは、玄関の扉を閉めて出て行った。
着慣れた迷彩服に腕を通しながら、ハンターはため息をついていた。
視界の隅には、五人でうつっている昔の写真が飾ってあった。
右端にはガタイのいい男が仁王立ちをしており、その隣で若い女性が二人、くっついてVサインを送っている。そしてそれぞれの女性の後ろには、若い男が一人ずつ。肩を組んで前にいる女性二人を指差しながら、なにやらニヤついている。
「ディヴァイナルか……もう足を踏み入れることもないと思っていたが」
写真立てをパタンと倒し二丁の拳銃に弾丸を装着すると、シェラ

の待つ外へとハンターは歩みを進めていった。

その3：いざディヴァイナルへ

王都ディヴァイナルへと向かいつつ、通りすがりの乗合馬車を探す。本来ならマスカーレイドから王都へと向かう乗合馬車があるのだが、シェラの経費の削減というレッシュじみた行為により途中まで歩くことになっていた。

「そうか、王都に行けばレッシュがいるだろうな」

「そ、そうなの？」

すこし慌てながら、シェラが聞き返す。ハンターは怪訝な面持ちでシェラを見つつも話を続ける。

「あいつは第四部隊の隊長だからな。入隊試験の日に席を外すことはないだろ」

「そういえば……」

話の成り行きから思い出したのか、シェラがハンターへと尋ねてくる。

「特殊部隊って何部隊あるの？」

「そんなことも知らないのに、受験に行くのか？」

「だから腕試しだって。特殊部隊に入るつもりなんてないし」

「それならわざわざ、おれを雇ってまで行かなくてもいいんじゃないか？」

ハンターのもっともな意見を、愛想笑いを浮かべる。まるでなにかを隠そうとしているかのようだ。

鼻息をフンと鳴らし、ハンターは特殊部隊について語りだした。

「特殊部隊ってのは、第一から第四まであるんだ。昔は第三までしかなかったんだが、数年前に第四部隊が新設されたんだ。つまりレッシュは第四部隊の初代隊長だな」

「へぇ、若いのにすごいね……」

「まああいつには天性の才能があったからな……盗賊の」

シェラがプッと吹きだす。もしこの場にレッシュがいれば、間違

いなく例の言葉が聞けただろう。
「それで第一は剣術、第二は魔法、第三は射撃のエキスパートが集まってるんだ」
「じゃあ第四は盗賊のエキスパートが集まってるの？」
「そういうことだ。今の発言は今度レッシュに伝えておいてやるからな」
「げっ」
自分の発言を棚に上げて、ハンターがフッと笑う。
「各部隊は隊長を合わせて五名が上限で、少ないのはかまわないが五名を越えることはない。途中で欠員が出た場合、部隊員全員の了承があれば、新たに補充ができる。まあ、補充の記録はほとんどないがな」
そこでようやく乗合馬車の姿が見えたので、二人は運賃を払って客車へと乗った。
二人の他に数人の客の姿があったが、共通するのは武装をしていることだった。もしかすると全員王都の試験を受けに行くのかもしれない。
「じゃあわたしは第一部隊を受ければいいのね」
第一部隊という言葉に反応して、じろりとシェラに視線が集中する。緊迫した車内にシェラは萎縮しつつ、小声でハンターに尋ねる。
「だったら、ハンターもついでに受けてみれば？　射撃は第三部隊なんでしょ？」
だが、ハンターはシェラの何気ない言葉にもかなりの遺憾を感じたらしい、キッとシェラをにらみつけると、
「おれはいい」
そう言ったきり、なにを聞いても返事をしなくなってしまった。
「どうしちゃったんだろ……」
わけもわからず、シェラも黙り込む。そのまま二時間のときが流れ、乗合馬車は王都ディヴァイナルの中へと入っていった。

その４：頬をかすめる弾丸

「ふう、やっとついたね」
シェラが周囲を見渡してぼやく。溢れんばかりの人が、道にごったがえしている。マスカーレイドも少なくはないが、ディヴァイナルはその数倍は軽くいっているだろう。
入り口からＶ字型にのびていく道に沿って、カラフルな高い建物が隙間なく建てられている。地面も赤や黄色などの色を彩り鮮やかにはめ込み、全体に明るい雰囲気を浮かび上がらせている。
マスカーレイドは地盤の関係で、あまり高い建物が建てられないが、ディヴァイナルは四、五階建ては当たり前のようだ。
宿屋だけでなく、武器、防具などの装備品を売る店から、みやげ物の店まで数多く並んでおり、普通の民家はほとんどない。それもマスカーレイドとは正反対のものだった。
「いまは特殊部隊の試験の時期だから、やっぱり人が多いな。まあ普段から少なくはないが」
まだあまり機嫌がよくないのか、仏頂面で答える。これから起こる事体を把握しているシェラの全身に、冷や汗が広がっていった。
「あ、来た来た」
聞き覚えのある声に振り向くと、赤髪のポニーテールに黒の上下といういつもの格好に、緑色の腕輪をつけたレッシュの姿があった。ただいつもと違い、手には封筒を持っている。
「レッシュか。忙しそうだな」
「いやあ、ありがとねシェラ。ハンターを連れてきてくれて」
ハンターを無視して、シェラと握手しているレッシュ。一瞬カチンときたハンターも、次の瞬間にはレッシュの言葉に関心が移っていた。
「ちょっと待て。連れてきたってどういうことだシェラ」
「えへへ、ごめんねハンター。実はレッシュに頼まれてたの。ハン

ターを王都に連れてきてほしいってね」
「なんだと！？」
パッとレッシュを見ると、レッシュは口笛を吹きながらそっぽを向いていた。どうやらシェラの言っていることに偽りはないらしい。
「じゃあ、ディヴァイナルに来たことがないってのは……」
「もちろん嘘よ。傭兵の仕事やってたんだから、ディヴァイナルの場所だって知ってるわよ」
「当たり前じゃない。騙されるほうがおかしいわよ」
相槌を打ったレッシュに、ハンターの舌打ちが送られる。
「ちっ……この盗賊が」
「盗賊って呼ぶな」
すかさず訂正をうながすレッシュにも、今回はひるむことなく向かい合っていた。
「今度はなにを企んでるんだ？　まさか入隊試験の手伝いをしろっていうんじゃないだろうな？」
「うーん、近からずも遠からずってとこかな」
「いい加減にしろよレッシュ……おれは帰るからな！」
「ちょっとハンター。報酬は？」
「いらん！」
レッシュを突き飛ばし、ハンターは乗合馬車へと向かおうとした。刹那、ハンターの耳元でプシュンという風きり音が聞こえた。その直後に地面の石畳がえぐれ、破片が飛び散っていく。
「……レッシュ」
「なぁに？」
ハンターの聞きたいことを理解しているのか、レッシュはわざとらしく満面の笑みを浮かべていた。
「まさか、いるのか？」
「もちろん。すぐに降りてくるんじゃないかな」
諦め気味の吐息と共に、ハンターはその場にうずくまった。なにが起こったかわからないシェラは、その場で一人立ちすくむしかな

かった。

その5：ファリス＝セルフィッシュ

数分後、三人に近づいてくる一人の女性がいた。腰まで伸びた赤髪が左目を隠し、手入れがよく行き届いているのかふわふわと揺れている。

黄色の上着に足首までの長いスカート、左手の肘には肘当てが、二の腕には青い腕輪がついている。そして右手には一メートル半はあるであろうスナイパーライフルが握られていた。

「久しぶりだな、ハンター」

「ファリス……当たったらどうするつもりだったんだ？」

「心配するな。当たらないように狙っている」

ファリスと呼ばれた女性は、スナイパーライフルを肩にかつぎつつ微笑んでみせた。

「あの……どなた？」

たまらずシェラが尋ねると、二人の代わりにそばにいたレッシュが答えてくれた。

「第三特殊部隊の隊長、ファリス＝セルフィッシュよ」

「セルフィッシュって……もしかして？」

「そっ、わたしの姉さん」

自慢の家族なのか、レッシュは胸を張って答えていた。言われてみると、どことなくレッシュに似ている気もする。

「きみがシェラか。話は伺っている」

「初めましてファリスさん。シェラフィールです。わたしのことはシェラで結構ですよ」

「ならばわたしもファリスでいい。よろしく頼む」

握手を求めてくるファリスに、シェラは快く応じた。特殊部隊の隊長というとどうしても強くていかつい男を想像してしまうが、ファリスもレッシュもそんな面影はまったく感じさせない。

「ではシェラにはレッシュが説明してくれ。ハンターにはわたしが

説明する」
「えっ、まとめて説明してくれればいいんじゃないんですか？」
シェラが尋ねると、ファリスの視線がハンターへと向けられる。
まるで許可を得ようとしているかのようだ。
「いくぞ、ファリス」
仏頂面のまま顎で右の道を指すと、ハンターはさっさと歩いていってしまった。このようすではどうやら別々の説明ということになりそうだ。
「というわけだ。頼んだぞレッシュ」
「うん！」
まるで甘えん坊の子どものように元気に返事をすると、レッシュはハンターを追って去っていくファリスに手を振っていた。普段のレッシュとは明らかに雰囲気が違う。
「それじゃあ、行きましょうか」
「行くって、どこへ？」
「行きつけの店があるんだ。そこなら二人きりで話せるからね」
レッシュの案内にしたがって、ハンターたちとは反対の方向へと進んでいく。
ハンターの様子を気にしながらも、シェラはレッシュの後についていった。

その６：写真の主は？

「いらっしゃい、レッシュちゃん」
愛想のいいおかみに出迎えられ、レッシュは軽く手を上げた。
木造のカウンターとテーブルが並び、褐色の光が店内を照らしている。ちらほらと座っているお客さんは、注文した食事を食べながら舌鼓をうっていた。
「奥の部屋、あいてる？」
「ええ、大丈夫よ」
おかみに案内されて、二人は店の奥へと進んでいく。区切られた一室の中は座敷になっており、あまり見かけない畳が、特有の匂いを放っている。
「注文はお勧めランチ二つで」
「オッケー、すぐに持ってくるよ」
サラサラと伝票に注文を書きなぐると、おかみは部屋を出て行った。
「ここの料理は美味しいよ。オートエーガンにも負けないぐらいにね」
ディヴァイナルでもお勧めの店らしく、レッシュは胸を張って自慢していた。シェラもマスカーレイドに知人が来たら、きっとオートエーガンを自慢するだろう。レッシュの気持ちが十分に理解できる。
「うん、楽しみにしとく。それで今回の依頼は……」
「そうだった。じゃあさっそく、説明しよう」
持っていた封筒から、二枚の資料を取り出す。一枚は写真、そして一枚はなにやら長い文章がこまごまと書かれていた。
「これはだれ？」
まず写真を手にとって、尋ねる。レッシュは笑いをこらえるように口に手をやり、

「だれだと思う？」
逆に聞き返してきた。写真には二十代後半ぐらいの男性が、きらびやかな服装で写っていた。それだけ見れば高貴な人物を思わせるが、無邪気に放たれたウィンクとピースサインが、貧相さもかもしだしている。
「……レッシュの父親？」
「ハハハ、全然ちがうね。わたしの父さんがこんなに若いわけないでしょ」
言われてみれば確かにその通りだった。二十代後半ならば、ファリスとそう変わらない年齢だろう。もしかしたらファリスのほうが年上かもしれない。
「うーん、わかんないなぁ」
ギブアップしたシェラに、クスクスと笑いながらレッシュが答える。
「実はその人、王都ディヴァイナルを統べる王様……シングマス五世なの」
「こ、これが王様！？」
「女の子に見せる写真だっていったら、張り切っちゃってさ。逆効果だって分かってないんだから」
腹を抱えて笑うレッシュに、ポカーンと呆けるシェラ。王様というよりも、まるで友達を紹介しているような態度だ。
「それで、この王様がどうかしたの？」
「命を狙われてるの」
言いながら、もう一枚の資料をシェラに差し出す。細々とした文字に顔をしかめるシェラの心情を察したのか、簡単に説明してきた。
「それはディバイナルに敵対してる組織の名前と詳細が書いてある。簡単に言えばシングマス五世の命を狙ってる組織ね」
「そんな組織を野放しにしてていいの？」
「もちろん野放しにしてるわけじゃない。個々に撃破してるさ。だけど逆にそれが敵対組織に火をつけたみたいでね……」

資料を封筒へとしまってから、髪をかきあげる。レッシュの赤いポニーテールが小さく揺れた。

その7：刺客の狙い

「今回の特殊部隊の入隊試験に、刺客が紛れ込むって情報が入ったの。毎年数人はいるんだけど、今年はそれが多いらしくて」
「でもさ、入隊試験だとなんで王様が狙われるの？」
当然の疑問を受け、レッシュは満足げに頷いてみせた。
「入隊試験の内容は……もちろん知ってるよね？」
「いや、あんまり……」
ガクッと体を揺らし、今度は首を横に振る。どうやら少なからずショックを受けたらしい。
「入隊試験は各部隊によって違うんだけど、基本的には予選を行うの。第一部隊ならトーナメント形式で実戦形式で試合をする。油断すると、命を落とすわよ」
「そうなんだ……」
本気でなにも知らなかったシェラに、レッシュは少なからずの不安を感じた。それでもシェラは信頼できる仲間であり、腕の立つ剣士だった。
「それで予選の上位四名が、隊長を除いた特殊部隊員四名と競い合って、勝ち残った四人が新たな特殊部隊員に任命される」
「じゃあ、せっかく特殊部隊に合格しても、次の年に試験で負けたら即除名？」
「そういうことね。実力主義の世界だし。年齢、性別をいっさい問わず、優秀な者だけを採用するってわけ」
「レッシュは隊長なんでしょ？　隊長も試験があるの？」
「隊長に試験はない。ただ、試験の後で隊員が望むなら、隊長の座をかけて勝負をすることになる。もっとも勤続年数三年以上であることが条件だけど。仕事も知らない新米に、隊長は任せられないでしょ？」
確かにいくら腕が立ったとしても、それが直接指揮を執る才能と

は限らない。シェラも傭兵時代、仕事で組むことになった無能な隊長には、辛酸を舐めさせられた経験があった。
「レッシュは隊長の座を守り続けてるわけね。すごいじゃない」
褒めたつもりだが、レッシュはあまりいい顔をしなかった。いやな空気が室内に流れ出す。
その空気を断ち切ったのは、料理を運んできたおかみだった。
「はいよ。蒸し鶏とアスパラガスのサラダに、鮭のムニエルよ」
「ありがとう」
二人分の料理を置くと、おかみは一礼してから、
「ごゆっくりどうぞ！」
そのまま部屋を後にした。部屋の中にバターの匂いが広がっていく。
「先に食べてから、話をしましょうか」
「うん、そうだね」
二人は箸をつかみ、食事を始めた。レッシュの言ったとおりオートエーガンに負けず劣らずの美味だった。新鮮な魚の柔らかい食感と絶妙なバターと塩コショウのバランスが、口の中へと広がっていく。
きっとニオがこの場にいたら、熱心に味の研究をするだろう――ニオが食事を取りながらメモを取る姿を想像し、シェラの口元がわずかに緩む。
サラダは食材というよりも、ドレッシングが口当たりをよくしていた。甘くもなく、辛くもなく、すっぱくもないバランスの取れた味付けは、今までに食べたことがなかった。
「ふぅ、ごちそうさま」
「あれ、もう食べちゃったの？」
レッシュがまだ半分しか食べていないにもかかわらず、すでにシェラは食事を終わらせていた。オートエーガンの短い休憩時間を利用して食事を取るため、早食いが自然と身についてしまったのだ。
「いいよ、ゆっくり食べて」

「ううん、話しながら食べるから」
ムニエルの皮を飲み込んでから、口を開く。
「えっと……なんで入隊試験で王様が狙われるかって話よね？」
「そうそう」
「それはね、予選が終わった後に会食があるのよ。トーナメントでベスト四までいった人を招いてね。そこにシングマス五世も姿を現すってわけ」

その８：同時刻、ハンターとファリスは

「なるほどな、会食で狙いをつけるってわけだ」
そこは、薄暗い明かりに照らされた場末のバーだった。すでに運ばれていたウイスキーのロックを飲みつつ、ハンターが口を開く。
隣の席にはファリスがいるものの、他に客はいなかった。ファリスの話ではマスターの了承を得て、しばらく開店を見合わせてもらっているらしい。
ファリスの目の前に、赤いカクテルが運ばれてくる。透明感の強い液体の底に、枝のないさくらんぼが二つ沈んでいる。シスターセルフィッシュという名のカクテルだ。
「そうだ。会食では各部隊が四人ずつ、計十六人が会場にいる。その中のだれが王を狙っているのかは、当然のごとく分からない」
「それで、おれになにを望むんだ？　まさか試験を受けて会食の場に来いとか言うんじゃないだろうな？」
疑問形にして聞いたものの、おそらくそうだろうとハンターは確信していた。シングマス五世が狙われているという話であれば、当然ファリスたちの使命は王の命を守ることだ。
そしてそれを手伝うならば、会食の場に入り込むしかない――つまり、試験を受けてベスト四に残れということになる。
「分かってるくせに、わざわざ聞くんだな」
ファリスもハンターが理解していると分かっていたようだ。シスターセルフィッシュに口をつけ、小さく息を吐く。
「本当なら、こんなこと特殊部隊だけで解決したいんだがな」
「各隊長の同席はあるはずだ。それで大丈夫だろ？」
「相手が何人か分からないんだぞ。今回は特に多いと聞いている。ハンターが残れば同時に怪しい奴も一人消えるんだ。それに人手は多いに越したことはない」
「だったら特殊部隊の隊員を集めればいいじゃないか」

「そんな仰々しい会食があるか？　それに……」
ファリスが一呼吸おいてから、ハンターから目をそらしてぼやいた。

その9：シーバス部隊

「無敵と呼ばれたシーバス部隊と、今の部隊は違うんだ……」
シーバスという名に、ハンターがピクリと眉を動かした。手に握ったコップがゆれ、中の氷がグラスとぶつかり音をたてる。
「あの頃は、なんでもできた。どんな任務でも達成できた」
「昔のことさ。感傷に浸るまでもない」
「そうか？　まだあれから五年しかたっていない」
「五年もだろ」
「そうかもしれない。だが、いまでもわたしはあの頃の栄光が、頭から離れないでいる」
二口目でシスターセルフィッシュを飲み干し、グラスをマスターへと押し出した。マスターはそのグラスへもう一度同じ液体を入れて、ファリスへと押し返す。
「シーバス部隊と呼ばれた第三部隊の中で、まだ残っているのはわたし一人だけだ。無力な自分を思い知らされるよ。わたしでは、あの頃の第三部隊へと戻せない」
「どんなグループでも、歴史が重なれば優秀な時、無能な時は出てくる。仕方のないことさ」
「違う。今の第三部隊は決して無能ではない。シーバス部隊が優秀すぎたんだ。わたしはその幻影に捕らわれて、隊員を信頼できない――ダメな隊長なんだ」
グラスを握ったまま、ガクッとファリスの体が崩れ落ちる。カウンター上に乗った頭から伸びる髪の毛が、ハンターには血液のように見えた。
「わたしは、どうすればいいんだ。どうすればあの頃に戻れる。どうすればまたシーバス部隊が結成できるんだ……」
「無理な話だ。もう隊長はいない」
「隊長が死ななければ、わたしたちがもっとしっかりしていれば…

…」
「いまさら悔やんだところで、何も変わりはしない」
「いまだから悔やむんじゃないか！　何かが起こる前に――隊長が死ぬ前に悔やむなどできないだろ！」
　ダンッとカウンターを叩き、おもむろに顔を起こした。顔にかかった髪が大きく揺れ動く。
静まり返った店内でも、ようやく聞こえるような声で、ファリスはポツリとつぶやいた。
「悪かったな。つい取り乱してしまった」
「シスターセルフィッシュ一杯で酔うとはな。弱くなったんじゃないか？」
「そうかもしれない。いや、酒でなく精神的に弱くなったのかもしれないな。酒は簡単に心を包む。それが安らぎのときもあれば、苦しみのときもある」
　うなだれたまま動かなくなったファリスの肩を叩くと、ウイスキーの料金をカウンターへと置いた。そのまま入り口へと向かう。
「ハンター……」
「気が向いたら、入隊試験の受付に行ってやるよ。気が向いたらな。もちろん話は通ってるんだろ？」
「ああ、いつでも大丈夫だ」
　ハンターはそのままバーを後にした。店内ではファリスがシスターセルフィッシュを飲み干していた。グラスを再びマスターの前に差し出すが、中にあったさくらんぼの姿は見当たらない。
「次は――そうだな、トゥーハンドユリスを頼む」
「かしこまりました」
　改めて作られるカクテルをぼんやりと眺めながら、ファリスはさくらんぼの種を二つ、吐き出していた。

その10：セルフィッシュ家の夜

床に敷かれた布団で目を覚ましたシェラは、大きく背伸びをしていた。時間は朝の五時。入隊試験の受付は、まだ四時間先だ。

隣のベッドでは、レッシュがまだ寝息を立てている。明日――正確には今日だが――の試験への道案内もかねて、一緒にレッシュの家へと泊まったのだ。

あまり物は多くなく、必要最低限のものしか配置されてないシンプルな部屋。レッシュの話では、滅多に家に帰らないため、必要ないという理由らしい。

やることもなくシェラは、愛用のツーハンデットソードを鞘から抜いた。途端に背後から、撃鉄を起こす音が聞こえる。

「動くな……」

両手を挙げて、シェラの動きが止まる。頭に銃口を押し付けられるも、シェラは落ち着いていた。

「あの……レッシュ？」

「ん？　ああ、シェラ。どうかしたの？」

「どうかしたのじゃないよ。すぐに拳銃を下ろしてくれない？」

そこまで言われて、ようやくレッシュは我に返ったようだ。

「あっと、ごめんね。剣を抜く音が聞こえたから、つい……」

「まあ、気持ちはわかるし、わたしが不注意だったんだけど……」

頭から硬い感触が無くなり、ようやくシェラは息をついた。撃鉄を戻したレッシュは、枕の下へと拳銃を戻す。いつも使っているデザートイーグルではなく、護身用の短銃らしい。

「こんな朝早くにどうしたの？　まだ五時じゃない」

「いや、いつもの習慣でね。緊張ってのもあるかもしれないけどさ」

剣を鞘へと戻しながら、シェラがぼやく。あくびまじりでレッシュが、部屋のカーテンを目いっぱいに開けた。

薄暗い空の所々に、雲がかかっている。快晴ではないが、雨の心

配もなさそうだ。
「あのさ、レッシュ」
「ん？」
振り返りながら、レッシュが首をかしげる。

その11：レッシュの過去

「聞いちゃいけないのかもしれないけど……」
「だったら聞かなければいいじゃない」
「でも、気になるからさ……」
「まっ、分かる気はするけどね。ハンターのことでしょ？」
シェラは無言で頷いた。長い髪を手早くまとめながら、口元を軽く緩めるレッシュ。
「本人に聞けばいいんじゃない？」
「教えてくれると思う？」
「いいえ、思わないわ。だけどそれなら、なおさらわたしからは言えないわ」
「でも……」
唇を噛みながら、シェラが悔しそうに顔をゆがめる。
「しょうがないわね……ハンターのことは話せないけど、わたしの昔話ならしてもいいよ？」
シェラの隣に座り、微笑んでみせる。シェラが頷くと、レッシュは記憶を探るように、顔を上向かせた。
「わたしはね、本当は第三部隊の人間だったんだ」
「えっ？　第三部隊って、射撃の部隊だよね？」
「そう。わたしはファリス姉さんに憧れて、小さい頃から射撃の練習をしてた。入隊試験は十六歳から受けられるんだけど、三年目でようやく合格したわ」
「でもそれって、すごいことよね？」
「まあね。十六歳で合格した人も知ってるけど、十代で合格する人はほんの一握りかな」
「だから射撃が得意なんだ」
感心するシェラの隣で、自嘲気味に微笑む。
「だけど、二年ほどで除隊になったのよね」

「どうして？」
「第四部隊の設立が計画されたからよ」
悔しそうに、歯軋りを鳴らすレッシュ。畏怖を覚えつつも、シェラは尋ねた。
「第四部隊って、盗賊の……」
「盗賊って呼ぶな」
「え、えっと……解除部隊？」
なんと呼んでいいか分からず、恐る恐る聞き返す。
「そうか、解除部隊か……それもなかなかいいかもな」
口元に手をやりながら、ひそかにほくそ笑む。少し機嫌が回復したらしく、硬かった表情が和らいでいく。
「だ、だけど、その第四部隊とレッシュと、どんな関係があるの？」
自然と沸き起こる疑問に、レッシュは淡々と答えた。
「新しい特殊部隊を作るとなると当然、隊長が必要となる。それも、特殊部隊の仕事に精通している人間が望ましい」
「そういえば、特殊部隊の仕事ってなんなの？」
シェラが尋ねると、少し呆れながら、
「本当に知らないの？」
レッシュが聞き返してくる。
「わ、悪かったわね……でも殊部隊に入るつもりなんて、なかったし。今回だってレッシュからの依頼がなかったら受ける気も起きなかったし」
身振り手振りを交えながら、言い訳を語る。レッシュは苦笑しつつ、説明を始めた。
「特殊部隊ってのは名前の通り、王都に仕える兵士の中でも特別な扱いを受けているの。普段の行動は自由。仕事がなければ、家で寝てたってかまわないし、旅をしてたってかまわない。だからわたしは、冒険家として世界中を旅して回ってるの」
「でも、それじゃあ仕事が出来たときに、困るんじゃないの？」
「それを解決するのが、この腕輪ってわけ」

右袖をまくって、緑色の腕輪を見せる。以前、レスチアが滝に爆弾を仕掛けた時に、自警団へと提示していたものだ。
「この腕輪は身分証明であるのと同時に、緊急時にはすぐに王都へと召還される魔法がかかっているの。確かに自由に行動はできるけど、ひとたび仕事ができれば、問答無用で王都へと呼び出されるってわけ」
「それって、落ち着いてられないんじゃ……」
「まあね。宿屋で寝てて、気がついたら王都にいたって時もあるし。だけど、固定給があるからね。仕事がなくても結構な額のお金が入るし、最近では仕事が終わると元いた場所へと戻してくれるから、これでも大分、働きやすくなってきてるのよ？」
レッシュはそう言っているものの、シェラはあまり乗り気でなかった。やはりお抱えという点では、普通の部隊と変わらない――それがシェラの感想だった。
「仕事内容は、まあ危険なものが多いといえば多いわね。敵対する組織と戦ったり、未開発の地に入って調査したり。通常部隊は専守防衛が常だけど、特殊部隊はこちらから打って出るのが主な仕事ってとこかしら」
ようやく仕事内容を理解できたシェラが、大きく頷いてみせる。そして先ほどの話を進めるべく、聞き返した。
「で、第四部隊の隊長に、レッシュが選ばれたってわけなの？」
「そういうこと。手先の器用さと身軽さを、運悪く買われたせいでね。当時の第三部隊長に勝手に決められたのよ。反抗の余地もなかった」
大きくため息を吐いてから、レッシュが続ける。
「それからの五年間――特に最初の二年間は、本当に地獄だったわ。性質の悪い隊員を統率したり、やりたくもない鍵開けや罠の解除を勉強したり……その上、盗賊呼ばわりされるんだから、たまったもんじゃないわ」
「だから、盗賊って呼ばれるの、嫌なんだ」

「正直に言うと、早いところ隊長を辞して、第三部隊に戻りたいんだけどね。まだできて間もない部隊ってのもあるのか、隊員として三年間勤続する人材がなかなか出てこないのよ。おかげで隊長は、未だにわたしのままってわけ」
「三年続いたとしても、その隊員が隊長になりたがるかどうか、分からないしね」
「そっか、その可能性もあるのか……気づきたくなかったわ」
うなだれるレッシュをみて、自分の失言に気がつくも、時すでに遅かった。
励まそうと言葉を捜すシェラ。だが、思いつく前に、レッシュがおもむろに立ち上がった。

その１２：朝食

「さてと、昔話は終わり。朝ごはんでも食べましょうか」
「う、うん」
シェラが窓の外に目をやると、きらびやかな日光が室内へと降り注いでいた。それが逆にレッシュのかげりを、大きくしている気がした。
階段を下りていくと、リビングではファリスがコーヒーを飲みながら、新聞に目を通していた。整った服装が相成って、大人の女性の雰囲気をかもし出している。
「おはよう、ファリス姉さん」
「おはようございます」
「ああ、おはよう」
新聞を折りたたみ、ファリスは二人にコーヒーを入れてくれた。
二人の朝食の準備は、レッシュがキッチンで簡単に作っている。
メニューはトーストとハムエッグ。それに付け合せ程度の生野菜だった。
「よく眠れたかい？　シェラ」
微笑みながら、ファリスが尋ねてくる。柔らかそうな赤髪に整った顔立ちは、改めて観察していたシェラの胸を高鳴らせた。
「えっ？　あっ、はい。一応……」
「レッシュから話は聞いているが、なるほど。相当腕が立つようだ」
「そ、そんなことないです……」
「謙遜することはない。もっと胸を張って、自信を持てばいい。傭兵という仕事を一生ものにしたいのなら、なおさらだ」
すぐ横にいたレッシュに顔を向けると、レッシュはウインクをして見せた。どうやらシェラを腕の立つウエイトレスとしてではなく、傭兵として紹介してくれたらしい。
「だが、油断は禁物だぞ。特に第一部隊は命がけの勝負だ」

「はい……」
「もっとも、最初から殺しを目的とした受験生でもなければ、命を奪おうとまではしてこないがな」
「が、頑張ります」
ファリスはそれだけ告げると、椅子から立ち上がった。
「もう行くの？」
「ああ、ハンターがいるかどうかの確認もしたいからな。遅刻だけはするなよ、レッシュ」
「分かってるって、いってらっしゃい」
無邪気に手を振るレッシュに応えてから、ファリスは部屋の外へ出て行った。玄関の扉が開き、閉じる音が続いて聞こえてくる。
「さてと、それじゃあご飯を食べたら……」
レッシュが告げつつ振り返ると、シェラはすでに完食していた。口元をナプキンで拭いつつ、満面の笑みを浮かべている。
「えっ、どうかした？」
「いや、なんでもない」
レッシュは苦笑いをしながら、自分の朝食を急いで胃の中へと押し込んでいた。

その13：クラウディ＝アルティメット

試験会場へと二人が向かうと、すでに人だかりができていた。混乱を避けるためにいくつも設置された受付も、行列が成されている。
「じゃあ受付をしたら、案内の紙をもらえるから。第一部隊の試験会場まで行ってね」
「ええ、分かったわ」
「ちゃんとベスト四まで残らないと、報酬はなしだからね？」
「ぐっ……」
一歩退くシェラのようすに、手を口元へとあてるレッシュ。
「フフッ、緊張しなくても大丈夫よ。シェラが普段の力を発揮すれば、きっと残れるから。サイクロプスを倒したときを思い出して」
「あれが普段の力だと思われても、困るんだけど……生き残るために必死だっただけ」
「たとえそうであったとしても、あれだけの力を出せるってことでしょ？　ファリス姉さんも言ってたけど、シェラはもっと自信を持っていい。そうすれば、自ずと傭兵の仕事へも復帰できると思うよ」
「自信、ねぇ……」
不安げな面持ちのシェラを残して、レッシュは去っていってしまった。だが、その表情はシェラ自身よりも、シェラを信頼しているといった善意に満ちていた。
受付を済ませてから、参加証明書と案内の紙を受け取る。そこには各試験会場への道のりと、試験のルールについての詳細が記載されていた。
とりあえず会場へと向かいながら、試験内容を確認する。
「制限時間一分。どんな小さな傷でも、先に相手に与えたほうが勝ち。ただし飛び道具でつけられた傷は無効。転倒や場外は即失格。タイムオーバー時は判定に持ち込まれる……か。どうやらスピード勝負みたいね。まっ、でないとこれだけの人数、一日じゃ捌ききれ

ないんだろうけど」
溢れかえる人員に、自然と漏れるため息。シェラは懐へと案内書を入れると、
「よし、行くか」
そのまま試験会場へと駆けていった。

第三部隊の試験会場で、ファリスは相当に焦っていた。
受付情報を総括する事務所で待機しながら、送られてくる受付情報を確認する。だが、未だハンター＝バウンティという名の人物は現れていない。
「ハンター、まさか本当に？」
不安に駆られながらも、ファリスはひたすらに待つしかなかった。第三部隊の隊長という役割上、試験会場へと出向いて直接探すわけにも行かない。
次々と送られてくる受付内容に、逐一目を通すファリス。受付終了五分前、ファリスの目はようやく、一つの名前で動きを止めた。
「クラウディ＝アルティメット……だと？」
お腹の底から、自然と笑みが込み上げてくる。気がつくとファリスは人目もはばからず、笑い声をこだまさせていた。
「ファリスさん？」
総括の一人が心配そうに尋ねてくるのを、軽く手で制する。目元から生まれてきた涙を拭いながら、
「わたしに対してのあてつけか？　まったく、何を考えてるんだかな……」
ファリスは鼻で笑うと、事務所の出入り口へと足を向けた。
もうすぐ試験が始まる。長い一日になりそうな予感がした――。

その１４：入隊試験、始まる

シェラが会場に着くと、人だかりが闘技場を包んでいた。人数と場所の関係から、特殊部隊の試験場は各々離れた場所にある。
　控え室の入り口で、受付から発行された参加証明書を提示する。中へ入ると、筋骨隆々の猛者たちが、それぞれ多種多様の武器を持参していた。
　シェラのツーハンデットソードより大きな剣を持つ者もいれば、短剣を数十本、腰から下げているものもいる。
ほとんどの戦士が神経を張り詰めており、一分の隙も伺わせない。中にはヘラヘラと笑っている、例外もいるが――。
「あれ？　シェラじゃない。あなた特殊部隊に入りたかったの？」
　不意に声をかけられて振り向くと、そこには見覚えのある顔があった。マスカーレイドで医療を営む、アクサ＝ヤーナだった。
「アクサ先生！　こんなところで何をやってるんですか？」
「第一部隊は怪我人が出るからね。いろんな街の医者が、毎年交代で呼ばれるのよ。今回はわたしが当番ってわけ」
「へぇ……大変ですね」
「シェラも気をつけてね。心臓を一突きにされたら、さすがにわたしでも治せないからさ」
　一瞬ひるんだシェラに、クスッと微笑むアクサ。
「まあそれは冗談だけど。本当に無理しないようにね」
「ありがとう、アクサ先生」
　シェラがお礼を言うと、アクサは手を振って救護室へと消えていった。
　あたりの雰囲気に圧倒されていたシェラは、知り合いに出会えたことで少し気分が落ち着いていた。
　会場へと参加者が集められ、簡易ステージで改めてルールを説明される。その後、プレートアーマーと二メートル近い大剣を持った、

筋肉質の男性が姿を現した。
手首には見覚えのある腕輪がつけられている。ただ、ファリスやレッシュの物とは違い、赤く輝いている。
「わたしが第一特殊部隊の隊長を勤める、フランカー＝ドイルである」
羨望の眼差しで、周りの人間が隊長を見上げる。だが、シェラはその人物に見覚えなどなかった。どうやら特殊部隊を目指し続ける者には、ヒーロー的存在らしい。
「予選の種目は例年通りだが、命をかけた勝負であることは間違いない。油断せずに、日ごろの成果を発揮してくれ。共に戦える日が来るのを願っている」
そういって一礼すると、ステージに背を向けて去っていった。受験者から歓声がこだまして、会場は一時混乱に巻き込まれたものの、それも例年通りなのか、係りの者の指示によってすぐさま冷静さを取り戻していった。
試合はすぐに始まり、早々と進行していく。三十分もすると、シェラの番がやってきた。
選手紹介が為されてから、ようやくシェラは相手の姿を知った。まだ幼さの残る青年だ。もしかしたら十六歳での初挑戦なのかもしれない。
「い、いくぞ！」
震える手でショートソードを持ち、シェラに向かって斬りかかってくる。シェラは半身だけ体を避けて攻撃をかわすと、青年の前に足を差し出す。
「う、うわわっ！」
あっさりとシェラの足に引っかかった青年は、そのままこけてしまった。
「勝者、シェラフィール！」
レフェリーの判定が述べられて、がっくりとうな垂れる青年の頭を撫でる。

「戦いの基本は下半身だよ？　もっと頑張ってから、また挑戦してね」
悔しそうに顔をゆがめる青年の頭を撫でて、にっこりと微笑む。
青年は頭を下げてから、走り去っていった。
「この調子でいければいいけど……」
まだまだ続くトーナメント表を眺めながら、自然とため息を漏らす。戦いはまだ、始まったばかりなのだ。

その15：ハンターの場合

「ショアン＝フィナーゼ、クラウディ＝アルティメット、入場！」
お目当ての選手が呼ばれ、ファリスは目をしかめて凝視した。各会場に用意された、隊長専用の席からは少し遠いが、顔は容易に確認できた。
間違いなくクラウディ＝アルティメットの正体はハンターだった。
「頼むぞ、ハンター」
ファリスが願う中、種目が発表される。
第三部隊での入隊試験は、ターゲットを射撃で狙うという簡単なものだ。ただし、受験者には直前まで、その距離やターゲットの大きさは発表されない。
その上、それらは毎回違うよう設定されている。直前の受験者のようすを伺って、参考にというわけにはいかないのだ。
「距離、二十五メートル。ターゲット三角」
冷静な口調で審判が告げると、所定の位置にターゲットが五つ現れる。先攻はショアンだ。
「相手が悪かったな。俺は巷ではちょっとした有名人でね。この程度の試験は、目をつむってでも出来る」
言いながら、立て続けに五発の弾丸を発射する。その全てがターゲットを捕らえ、風穴を開けた。
観客から聞こえる、悲鳴に近い歓声。どうやら相当腕の立つ、有名人らしい。
「さあ、恥をかく前にギブアップしたほうが……」
ショアンが半笑いで、得意げに語っている途中にもかかわらず、ハンターのデザートイーグルが五度、咆哮を放つ。
ショアンと同じく、その全てがターゲットへと直撃する。審判団が二人の破壊したターゲットを確認してから、高々と上げた手をハンターへと向けた。

「勝者、クラウディ！」
「ば、ばかな！」
取り乱したショアンが、審判団の確認したターゲットへと駆け寄る。確かに二人の銃弾は全てターゲットを捕らえていた。
だが、弾痕がまばらなショアンに比べ、ハンターの弾痕はすべて的の中心に形成されていた。的を重ねると、まるで一発で五枚を打ち抜いたような――それだけ正確な痕跡を残していたのだ。
「相手が悪かったな……」
「く、くそっ！」
「クラウディという名を聞いても誰か分からない時点で、お前はガンマンとしてはモグリなんだよ」
「クラウディ……まさか！　しかし、あの方は死んだと……」
「生き返ったんだよ。期間限定でな」
ちらっと観客席を見やる。隊長のために作られた特等席でファリスは微笑み、ハンターへと頭を下げた。
「まったく、俺より年上のくせして、世話が焼ける……」
ショックで膝をついているショアンを背に、ハンターは控え室へと戻っていった。ライバルの出現とショアンの敗北に、周りがざわめき立つ。
それでもハンターは気にせず、鼻歌を歌いながら待機するのだった。

その１６：シェラの予選最終戦

「シェラフィール＝ファインドイット、アッシュ＝クウル、入場！」
係員の声に合わせて、深呼吸する。最初の一歩を踏み出すと、背後から突然、殺気が溢れかえっていた。
「！？」
振り向きざまに背後へと飛び、殺気の元を確認する。だがそこには、飄々としたアッシュが短剣を回しているだけだった。
ざわめく会場の中で一人、シェラだけが現状を把握していた。
『こいつ、背後から刺そうとしてた……』
湧き出た脂汗が、頬を伝う。ゆっくりと闘技場へと上がったアッシュと、一定距離をおいてかまえる。
「姉ちゃん、一つ言っておくがな……」
シェラにかろうじて聞こえる声。会場の観客はもちろん、一番近くにいる審判ですらアッシュの声には気がついていなかった。
「生き残れると思うなよ？　あんたみたいな上玉を殺すのが、俺の趣味なんだ」
「なんだって？」
「合法的に人を殺せるんだ。こんなにいい大会はない」
右手に持った短剣を、おもむろに舐める。それだけでシェラは鳥肌が立っていた。
「そんなことしたら、失格になるわよ」
「俺ははなから特殊部隊に入隊する気なんてないのさ。ただアンタみたいな女を殺して、死にゆく様を拝みたい――ただそれだけさ。今回は対戦相手が男ばっかりだったせいで、こんなところまで来ちまったがな」
「あんたみたいな人間を、下衆って言うのよ」
「褒め言葉として受け取っておこう」
アッシュが短剣を逆手に持ち替えたところで、審判から試合開始

の笛が鳴らされる。
　その音に気をとられた一瞬で、アッシュの姿は目の前から消えていた。
「しまっ……」
　不用意な自分に嫌気が差しつつも、シェラは冷静に対処できていた。足元から聞こえた石畳を蹴る音と、抉るように下から上がってくる風斬り音に、すんでのところで反応する。
　かまえていたツーハンテッドソードを、柄から下へと叩きつける。手に伝わる衝撃に続いて、石畳と短剣が衝突する乾いた音。背後へと一度大きく間合いを取ると、右手を押さえつつシェラを睨むアッシュの姿を、ようやく捉えられた。
「やるじゃねえか……」
「あいにく、まだ死ぬ気はないんでね」
　今度はアッシュの動きから目を離さず、警戒を続ける。腰に下げた新たな短剣を引き抜くと、再びアッシュは突っ込んできた。
　だが、今回は先ほどと違う。完全にアッシュの体を補足していたシェラは、ツーハンデットソードを片手に持ちかえ、思い切り突き出した。
　動きが止まったアッシュから、血しぶきが飛び散った。同時にアッシュの体から飛び出た小さな物体が、石畳の上を転がる。
　それは、アッシュの親指だった。
「ぐあああああ！」
　苦痛に顔をゆがませながら、アッシュは傷口を押さえつつ膝をついた。
「勝者、シェラフィール！」
　シェラの勝利を宣言する審判の声。歓声がこだまする会場内で、シェラはアッシュを冷ややかに見下ろしていた。
「親指がなくなっちゃ、力を込められないでしょ。残念ね、大好きな人殺しが出来なくなっちゃって」
「き、貴様、覚えてろ！　この恨みは必ず晴らす！」

「そういうのなんていうか知ってる？　負け犬の遠吠えって言うのよ」
ツーハンデットソードを鞘へと収め、意気揚々と会場を後にする。これでシェラはベスト四に残ったと同時に、特殊部隊への挑戦権を得たことになる。
同時に、シングマス五世との会食の権利も得た。
これから始まる会食に、彼の命を狙う敵対組織が、何人いるかは分からない。
だれが敵かも分からない現状から、シングマス五世を救い出す。それが今回の依頼内容なのだ。
「おめでとうございます！　特殊部隊への挑戦は明日になりますので、今日は城でお休みください！」
受付嬢から会食の招待状を受け取り、額にかいた汗を拭う。
これからが本番――シェラはようやく、スタートラインに立ったにすぎなかった。

その17：入城

城までの道のりを案内図を頼りに進み、門番に招待状をみせる。
招待状を確認すると、門番は城の中へとシェラを招き入れてくれた。
「シェラフィール様、こちらでございます」
メイドに案内され、キョロキョロと落ち着きなく城内を見渡しながらついていった。
金縁に赤い色の絨毯が、フロア全体を埋め尽くしていた。左右にのびる階段が、勢いよく吹きだす噴水を囲んでいる。
階段を登り、二階にあった扉に入ると、弧を描いた廊下がずっと奥まで続いていた。
内側にはいくつもの扉がついており、外側には窓が備え付けられていた。そこから外を見ると、明かりの灯った城下町が広がっている。
夜になっているにもかかわらず、活気は未だ衰えていない。
「こちらの部屋をお使いください」
「うわぁ……」
案内された部屋を覗いたシェラから、思わず感嘆の声が漏れる。
床に敷かれた絨毯はフロアよりもフカフカで、ブーツを履いて入るのを躊躇してしまいそうだ。ベッドはふだん家で使っている物の、数倍の厚みがある。
部屋に飾られている湖畔を描いた絵画は、芸術にさほど詳しくないシェラでも、値打ちものだと感じさせられた。
「少しの間、こちらでお休みください。会食の準備が整い次第、呼びに参りますので」
九十度の礼をされて、慌ててシェラもお辞儀する。
だが、メイドは無表情のまま、部屋から去っていってしまった。
あとに残されたシェラは手持ちぶさたになり、とりあえずベッドへと腰をかけた。ふかふかの布団が、シェラの体を弾ませる。

「ハンターは結局、来たのかしら……」
不安に捕らわれつつ、ベッドの上へ寝転がる。柔らかな布団が、シェラの体を沈ませていった。
「何も起こらなければいいけど……」
シェラにとって一番ありがたいのは、シングマス五世を狙う連中が一人もベスト四に残っていない状況だ。何事もなく会食は終わり、報酬をもらうことが出来る。
ただ、そううまく話が進むわけもないだろう。もしそんな軟弱な連中なら、レッシュやファリスはハンターやシェラを雇ったりはしない。自分達だけで解決するはずだ。
「気合……入れなきゃ……」
言葉とは裏腹に、心地よいまどろみがシェラを襲ってくる。
まぶたを閉じると、真っ暗な世界が目の前に広がっていった。試合の疲れも重なったシェラは、そのまま深い眠りへと落ちていった。

その１８：会食会場へ

「シェラ、起きて、大丈夫？」
体を激しく揺すられて、ようやくシェラに意識が戻った。装備を着用したまま寝ていたせいか、体の節々に鈍い痛みが走る。
「うーん、なにぃ？」
目を開けると、そこにはレッシュの姿があった。不安げに覗き込んでいたものの、目を開けるとすぐに微笑み返してくる。
「まったく、心配したでしょ？　メイドが呼びに来ても反応がないって言うから」
「えっと……なんだっけ」
「まったく。もうすぐ会食が始まる。チャッチャと目を覚まして、しっかり仕事をこなしてもらわないと困るわ」
「あぁ、うん、ごめんなさい……」
寝ぼけ眼で謝りつつ、シェラがふらつきながら立ち上がる。そのままレッシュに連れられて、部屋の外へと出ていった。
弧を描いた廊下を進んでいくと、突き当たりに両開きの扉が姿を現した。レッシュが両手でゆっくりと開くと、中は縦長の部屋だった。
ぶら下がったシャンデリアが、室内全体を照らす。さらに天井はガラス張りで、きらめく星空のようすが伺える。
部屋の中央には、テーブルクロスに身を包んだ縦長のテーブルが、青白い光を放っていた。
すでに集まっている面々が、シェラとレッシュを見やる。戸惑うシェラにレッシュがテーブルの右の長辺を差した。
「シェラフィールさんは、そこに座ってください」
急に丁寧な口調になったレッシュが、空席の一つを指差す。そこがシェラの席なのだろう。
急いで席へと座り、改めて全体を見渡す。

テーブルの長辺部分に、各八人が向かい合って座っている。シェラの横辺りは、予選会場で見たメンバーなので、格部隊のベスト四が固まって座っているらしい。
短辺部分には三席と二席があり、三席のほうは真ん中が空席になっていた。空席の両隣は予選で挨拶をした剣士――フランカーと、赤いローブと黄色の腕輪をつけた魔術師が座っている。おそらく彼が、第二部隊の隊長なのだろう。
二席のほうはレッシュとファリスの姉妹が座っている。ファリスの近くには、ハンターの姿もあった。
「やっぱり来てたんだ……」
ほくそ笑んでいると、ハンターが目を合わせてくる。だが、シェラが反応する前に、目をそらしてしまった。
「どうしたんだろ、仏頂面で」
いろいろ話も聞きたかったが、シェラとハンターの席はかなり離れている。会食後に話をするしかなさそうだ。
「それでは今から、シングマス五世が入場される。ご起立脱帽のうえ、上座に注目してくれ。
また、会食中は武具の類にはいっさい触れぬようお願いする」
ファリスの挨拶に合わせて、全員が立ち上がる。ローブを身にまとっていた魔術師も、頭巾を取って顔を露出させた。
シェラも慌てて立ち上がり、空席へと注目する。正直に言うと、こういった堅苦しい場所は苦手だった。必要以上に緊張して、体を萎縮させてしまう。
上座後ろの扉が開き、豪奢な礼服に身を包んだ男性が、姿を現した。レッシュに写真で見せられた男性に間違いない。
今までにもまして、室内の空気に緊張が走る。

その19：銃声

だが、入ってきたシングマス五世は、まるっきりそういった形式に捕らわれない人だった。
「いやあ、どもども。あ、そんなに緊張しなくていいから」
ざっくばらんな口調で、手で制する。ちらりと横目で見ると、ファリスが呆れつつ首を振っているのが見えた。
「おっ、今回は女性が多いな。こりゃ我々男性陣も、うかうかしてられないな」
言われてシェラは初めて気がつく。今回の各部隊のベスト四に残ったメンバーのうち、男性は魔術師風の男が一人と、ハンターとその隣に一人の三人だった。他は全員女性だった。
つまり、第四部隊と第一部隊はシェラを含み、みんな女性ということになる。
「シングマス王。もう少し格式というものを――」
「世に並ぶ強豪たちとこうして会食が出来るんだ。無礼講でいいじゃないか」
「しかし、王の威厳というものが……」
「まあまあファリス、固いことを言うなって。隊長が固くなれば皆が固くなっちゃうだろ」
「はあ……」
半ば諦めていたのか、ファリスはあっさりと引き下がった。
「ささ、座った座った。すぐに食事が運ばれてくる。お互い楽しもうじゃないか！」
シングマス五世が座ると、皆が一斉に座る。先ほどまでの陰鬱な空気は、すでに消し飛んでいた。
前菜、スープ、メインディッシュと運ばれてくるも、だれもが無言のまま、会食は進もうとしていた。
それを止めたのも、やはりシングマス五世だった。

「なんだなんだ、みんな暗いぞ？　たとえ明日の本試験で落ちたとしても、ここまで残ったことは名誉なんだ。もっと自信を持つんだ。各部隊の隊長に質問でもあれば、この場を借りてするといい。これは単なる食事ではなく、会食なんだ。これでは集まった意味がないだろ？」
シングマス五世がそう述べると、一人の男性が手を上げた。
「恐れながら、第三部隊のファリス隊長に質問であります！」
第三部隊候補の男性――ハンターの隣の人だ――の蛮声が、部屋中にこだまする。側にいたハンターは慌てて耳を塞いでいた。
「なんだ？」
「第三部隊がシーバス部隊と呼ばれた五年前について、話を伺いたいであります！」
ファリスの手がピタリと止まった。食事をむさぼるハンターを横目で見てから、一度だけ咳払いをする。
「そうだな。あの頃は……」
刹那、質問に答えようとしたファリスの声を遮るように、重たい銃声が響き渡る。
「くっ……」
銃弾が命中したのか、第二部隊候補の男が、手から流れる血をもう片方の手でせき止めている。硝煙が立ち上る拳銃を握っていたのはもちろんファリスではなく、ハンターでもレッシュでもなかった。
「大声にまぎれて呪文詠唱とは、なかなか考えたものだな」
拳銃の持ち主が立ち上がり、拳銃を構えたまま血を流す魔術師に近づいていく――シングマス五世だった。
「まったく、毎年毎年こうも命を狙われるとは……自分では名君のつもりなんだけどな」
「どんな名君でも、少人数には恨まれるものさ……」
シングマス五世の横でぼやいたのは、ハンターだった。手にはいつの間にか握っていたデザートイーグル。銃口は質問をしていた男性の口の中へと押し込まれている。

「あが……」
「お前も一味だろ？」
「んがが！」
銃口を口に入れたまま首を振る男に、ハンターは冷たく言い放つ。
「お前が良識のある人間なら、あんな馬鹿でかい迷惑な声で質問しない。普通に考えれば、あの男の呪文詠唱を手伝ったってことになる」
「わたしも同意見だ。フランカー、レッシュ、この二人を牢屋に放り込め」
「仰せのままに。シングマス王」
レッシュとファリスの二人がそれぞれを武装解除し、連行していく。蛮声の男も観念したのか、がっくりとうなだれてしまった。
あまりにも早い事件の流れに、なすすべもなくただ呆然と見つめていたシェラは、ようやくそこで我に返った。
ハンターの視線が、チクチクと胸を刺す。シェラはだれにも気づかれないよう、小さく頭を下げた。

その２０：油断

「それにしても、よくお分かりになりましたな、シングマス王」
ハンターが尋ねると、シングマス五世は口元を緩めてみせた。
「あいつだけ緊張しているというよりも、我を失っているといった感じだった。異常な汗のかき方をしてたし、全身も震えていた」
「さすがはシングマス五世です」
「そういう君も、彼のようすに気がついていたようだが？」
「いえ、わたしはシングマス五世の反応で、ようやく気がついたに過ぎません」
「鳥肌が立ってくる喋り方だな」
「ええ、お互いに」
二人の両肩が、小刻みに震え始める。そして同時に、声を高々に笑い始めていた。
「まあなんにせよ、これで安心して会食を楽しめるってもんだ」
「まったくです……」
ふとした気の緩み――油断が、シングマス五世とハンターを包み込む。それが事件の発展へとつながるとも知らずに。
今度は三度の銃声が、広い部屋の中へと反響した。ハンターとシングマス五世が、懐にしまいかけていた銃を慌てて引き抜く。
銃の持ち主は第三部隊候補の女性だった。不気味に微笑む女性の拳銃は、天井へと向けられている。
自然と天井へと向けられた視線に、大きく映し出されるシャンデリア。だんだんと大きくなっていくそれは、無残にもテーブルの上へと落下していった。
シェラも含め、テーブルについていた面々が慌てて飛びのく。
耳をつんざく轟音と共に、砕け散るシャンデリア。同時に魔術師候補の一人が、シャンデリアに水をかけた。
ろうそくの火はあっさりと消え、部屋の中は一瞬にして暗闇と化

した。
「くそっ！」
ハンターは懐から発光弾を取り出すと、パイソン四インチへと詰め込む。そして壁へと銃口を向け、引き金を引いた。
弾丸が命中すると同時に、飛び散る発光液。薄暗く照らされる室内は、すでに終息へと向かっていた。
ハンターの横には、同じ第三部隊候補の女性二人、銃口はハンターへと向けられている。
シェラには第二部隊候補の杖が向けられ、情けないことに両手を上げていた。
ファリスは懐の拳銃を、第二部隊長は杖をそれぞれ握っている。だが、すでに第四部隊候補の短剣が、それぞれの喉下へと突きつけられている。
そしてシングマス五世は、第一部隊候補の剣が心臓、首筋へと向けられていた。残りの一人はシングマス五世が握っていた拳銃――四五四カスールを没収している。
「まさか……全員が？」
ハンターが呟くと、こめかみに銃口を押し付けられた。持っていた拳銃を落とし、両手を上げる。
武装解除された面々は手を後ろに回され、紐で縛られてしまった。そのまま部屋の奥へと押しやられ、床へと座らされる。
半分をハンターたちの監視に残し、残りの半分は三つある入り口へと警戒に向かった。全部で十二人、狭くはなくとも食事をするような場所だ。占拠するには十分な人数だろう。
「我々はフィメイル＝レジスタンス。悪いがシングマス王には死んでもらう」
「やめろ！」
手を縛られたままの状態で、ファリスがシングマス王の前に立ちふさがる。
「どいてくれ。他の面々に手を出すつもりはない」

「だったら、なおさらどけないな……」
「どかないなら、貴様も死んでもらうだけだ」
「主のために身を差し出すなら、本望だ」
互いの鋭い眼差しが交差する中、緊張感のない声がファリスの後ろから聞こえてくる。
「きみがリーダーか？」
「だったら、どうしたというのだ？」
「いや、殺される理由ぐらいは知っておきたいのさ。分けも分からないまま殺されるなんて、理不尽だし、それ相応の罪がわたしにあるなら、殺されても仕方がない」
「殺される理由だと？　心当たりがいくらでもあるだろう」
「それがないから聞いているんだ。自分で言うのもなんだが、善政を行っているつもりだ」
『善政を行っているだと？　笑わせるな……』
心の中で、レジスタンスリーダー――レティシアはそうぼやいていた。

その21：回想

『シングマス五世は腐っている。自分たちがどれだけ苦しんだか、分かっていないんだ』

ふと、頭の中に、故郷がよぎる。ディバイナルよりはるか北に位置する、小さな集落。そこがフィメイル＝レジスタンスの本拠地だった。

もっとも、レジスタンスという名前をつけたのは最近である。最初は王都に仕えていた夫を、戦争で失った妻が集った。お互いが協力して生きていくことを約束し、集落を作った。

幼い子どもを抱える親も多く、自分達の身を守るために日々、鍛錬を重ねた。そのおかげで、いつしか皆が夫を越えるほど強くなっていった。

もちろん、どこかに攻め込むつもりも、王都に反逆するつもりもない。ただ、自分達に降り注ぐ火の粉を払いのけるだけ。それだけで十分だった。

だが、事件はある日突然に襲い掛かってくる。子ども達の体に赤い斑点が現れだし、高熱にうなされるようになっていった。

外部からの攻撃には耐えうるレティシアたちも、これにはさすがに頭を痛めた。医学を学んだ女性はおらず、原因も治療法も不明だった。しかも子ども達にばかり伝染し、次々に病へと倒れていく。

夫を失い、今度は子どもまで失うのか――絶望に身を埋めるレティシアたちに、その時救世主は現れていた。たまたま近くを医者が通りかかったのだ。

医者の診断によると、この病気は『赤斑病』と呼ばれるものだと判明した。放っておくと一ヶ月で死を迎えるという。

幸運にも、その医者はわずかながら薬を持っていた。最初に発病した子どもへと処方箋を施すと、二日後には完治するという素晴らしい効き目だった。

だが、その薬は高価なもので、集落の子ども二十人を救おうとすれば、合計で二千万バッツかかるらしい。自給自足で生活しているレティシアらに、そんなたくわえはなかった。

途方にくれるレティシアたちに、医者は首をかしげる。彼の話では、戦争で家族を失った場合は、それ相応の恩給がもらえるはずだという。

そんな話をはじめて聞いたレティシアは、急いで王都へと使者を送る――わらにもすがる思いで。

だが、王都の返事はノーだった。レティシアたちは、夫を亡くしてから五年は経過している。もはや時効だというのだ。

その報告を聞いて、がっくりとうな垂れるレティシア。その耳元で、医者がぼそりと告げる。

「わたしも今の王都は腐っていると思います。それもこれも、シングマス五世の悪政のせいだ。あなたの夫が死んだのも、恩給が支払われないのも、全てはシングマス五世の決断からきている。そんな王が指揮を取る政治など、壊してしまったほうが世の中のためではありませんかね？」

レティシアが驚き目を丸くしていると、医者はシングマス五世の悪行を、次々と並べていった。レティシアたちと同じように、難癖をつけられて恩給をもらえなかった人々、無理な重税を課されている街など、後を絶たないと医者は語った。

「わたしの知り合いに王都の上層部がいましてね。彼ならこの世界をよくしていける。シングマス五世には、まだ後継ぎがいない。先代が若くして亡くなりましたからね。そうなると、わたしの知り合いが次の王になる可能性も高い。それに協力してくれれば、あなたたちも世の中を変えていけるし、子どもたちの病気を治す資金も出来る。どうですかね？」

それは悪魔のささやきだった。苦しむ子どもたちを前にした状況で、レティシアに選択肢は他になかった。

レティシアは集落の中でも、指折りの猛者たちを集めた。特殊部

隊の試験に残り、会食に参加できる上限でもある十六人を選び、残りは子ども達の看病へと勤めさせた。
医者は薬の材料を集めてくるといって、旅立っていった。帰ってきた時に一千万バッツさえ準備できていれば、子どもたちは皆、助かる――そういい残して。
さすがに腕に覚えのある連中が集まる大会で、十六人全員が残るというのは無理があった。それでも四分の三である十二人が残ったのだから、まずまずだろう。
そして今、計画は着々と進んでいる。これで子どもたちは助かるのだ。

その22：異常事態

だが――、
「レティシア？」
耳元で名前を呼ばれ、レティシアは我に返った。心配そうにレティシアを伺う仲間と、怪訝そうに見つめるシングマス王とその配下。
「ああ、すまない……」
レティシアは仲間を手で制すると、きつい眼差しでシングマス王を睨みつけた。
「お前をここで殺すのはたやすい。だが、それで許されるわけがない。よく自分の悪行を思い出し、後悔に後悔を重ねるがいい。それからなぶるように殺してやる！」
そのままレティシアは見張りを続け、メンバーの一部に食事を取らせ始めた。運ばれてきた料理はシャンデリアの下敷きになっているため、それぞれが持参した携帯食を頬張っている。
医者にはすぐ殺すようにといわれていたが、それではレティシアの気がすまなかった。
『これでいいんだ。懺悔して、土下座して、自分の考えを悔い改めさせてやる』
集落に残した、病気に苦しむ娘の顔を思い出しながら、レティシアは唇を噛んだ。

シングマス五世の暗殺を企んだ二人を、牢屋へと入れたレッシュとフランカー。会食場へと戻る際に、不穏な空気を読み取っていた。
「何かあったんですかね？」
「かもな……」
二人は顔を見合わせてから、走って会食場へと向かった。
入り口の前へと辿り着くと、メイドの姿をした女性が三人ほど、首をかしげている。

「どうした？」
「あ、フランカーさん。よく分からないんですが、会食場の扉に鍵がかかってるんです」
「鍵だと？」
フランカーはノブに手をやり、捻ってみた。確かに鍵がかかっており、開きそうにない。
「わたしの出番ですか？」
「ああ、頼む」
背後から乗り出してきたレッシュが、懐からキーピックを取り出し、鍵穴へと差し込んだ。
だが、二、三秒ですぐにキーピックを引き抜くと、首を横に振ってみせた。
「どうやら、鍵穴になにか詰められてるみたいです。粘土のようなものかと……」
「ってことは……」
「間違いなく、中でなにかが起こって、誰かが故意に扉の鍵を開かなくしたんでしょう」
「くそっ、無理やりこじ開けてやる！」
フランカーがノブに力を込めると、ミシミシと扉のきしむ音が聞こえてくる。
「ちょっ、待ってください、フランカーさん！」
「だがレッシュ、早くしないとシングマス王が！」
声を荒げるフランカーを、レッシュは手で制した。
「何かあったのは事実です。ですが、中の連中が目的を達成してないのも事実です。でなければ扉に鍵をかける必要など、ないですからね」
「た、確かにそうだな……」
「中の状況も分からないのに、いたずらに飛び込んでも危険なだけです。シングマス五世が目当てなら、飛び込んだ瞬間に殺されるかもしれません」

「ああ、まったくだ。すまなかったなレッシュ。つい頭に血が上っちまって」
頭に手をやりながら、フランカーが謝ってくる。レッシュとは年の差が親子ほど離れており、本当なら若造が！と一喝したいところだろう。
だが、同じ特殊部隊長としての信頼がフランカーを謝らせた。レッシュは頬を緩めて、首を振る。
「いいえ、フランカーさんのシングマス王を守るという気持ちが、すごく伝わってきましたよ」
「それはいいとしてだな。どうするつもりだ？　まさかこのまま指をくわえているわけにもいかないだろ？」
「大丈夫です。わたしが中の状況を調べてきますから。フランカーさんはここで待っていてください。もしも中で銃声や乱闘の音が聞こえたら、その時は迷わず飛び込んでください」
「ああ、分かった」
フランカーを置いて、レッシュは足はやに廊下を駆け抜けていった。目的地は一つ、中の状況を把握できる場所だ。

その２３：緊張感のない会話

「なあ、シングマスさんよ？」
シングマス王に近づいたハンターが、耳元で話しかける。
「なんだよ、ハンター」
「今はクラウディだ」
「言ってる場合かよ、まったく……」
「死にたいのか、黙ってろ」
レティシアは二人の様子を確認すると、拳銃を交互に二人へと向ける。
「別にいいだろ？　単なる世間話さ」
「脱出する作戦でも伝える気だろ？」
「この状況で、どうやって脱出すると？　それに慌てなくてもシングマス王さえ死ねば、俺は助けてもらえるんだろ？」
「お、おい、ハンター！　そりゃあないだろ！」
顔面蒼白にしてハンターに訴えかけるシングマス王に、レティシアは口元を小さく緩めた。
「そうだな。好きにしろ。どうせあと少しの命だ」
拳銃を引っ込めて、レティシアは腕を組んでそっぽを向いた。ここぞとばかりに後ろに下がりつつ、ハンターとシングマス王は囁き続ける。
「お前なぁ、俺を助ける気はないってわけか？」
「命あっての物種って言葉を知ってるか？」
「ひどい奴だな、まったく。バウンティの名が泣くぞ……」
ぼやくシングマス王を意にも介さず、ハンターは話を続けた。
「それで聞きたいんだが、心当たりは本当にないのか？」
「当たり前だろ。なんで俺が人民――しかも女性を苦しめなくちゃならんのだ」
「男だったらいいのかよ」

「時と場合による」
「やっぱり、死んだほうがいいかもな」
「じょ、冗談だって。人民は男女関係なしに俺の宝だよ！」
慌てて否定するさまを、にやけながら見つめるハンター。
「そう気を落とすな。俺だって、お前が悪政を行うような奴だとは思ってない」
「だろ？　そこんところをよく説明してやってくれよ」
「信じると思うか？　世間話をするような仲の人間の言葉を。戯言だと思うに決まってるさ」
「そりゃ、そうだよなぁ……」
がっくりとうな垂れるシングマス王に、ハンターはさらに近づき、声を抑える。
「で、実際のところどうなんだ？」
「だから俺はやってない……」
「そうじゃなくて、お前が死んだら喜びそうな奴だよ。そいつがお前を陥れようとしている可能性が高い」
少し考えてから、シングマス王は口をへの字に曲げた。
「そんな奴、いないと思うけどな……」
「あのな、ウォルガレンの滝の事件で、レスチアが無罪になったのを忘れたのか？　裏であの滝を壊そうとしている奴がいるんだ。思い通りに滝を壊すには、どうすればいい？」
「王座につくってわけか？」
「そういうことだ。まだお前には跡継ぎがいない。そうなると王都で重要なポストについている人間が、次の王になるはずだ」
「そこまでやるかな……」
首をかしげながらも、渋々と思い当たるふしをあげる。
「まあ、もし俺が死んだら、候補として上がるのは宰相のクローヴィス、大臣のロタール、それに軍師のミュラーぐらいだろうな」
「じゃあ、その三人の内のだれだが怪しいんじゃないか？」
ハンターの意見に天を仰ぐシングマス王。その視界に、黒い人影

が移る。慌てて目線を元に戻し、大きなため息をついた。
「どうした？」
ハンターの問いにも答えず、シングマス王はそれ以降、口を固くつぐんでしまった。

その２４：確認と決意

「どうやら無事みたいね……」
天井に張られた窓ガラスから、レッシュが中の様子を覗き込む。一瞬だけシングマス王と目があったものの、シングマス王はすぐに視線をそらしてしまった。
「あいつらにバレないようにか。それにしてもハンターとシェラを除いた全員とはね……骨が折れそうだなぁ。といっても、助けないわけにはいかないし」
レッシュは窓ガラスにコンパス状の器具を取り付けると、慣れた手つきでガラスに傷をつけていった。円盤状に切り取られた窓ガラスを取り除くと、直径一メートルほどの穴が開く。
もちろんレッシュは、そこに飛び込む気などなかった。そんなことをしても、あっさりと捕まって終わるだけだ。
レッシュは上半身を穴から会食場へと入れて、宙吊り状態でデザートイーグルを構えた。だが、フラフラと揺れてしまう不安定な体のせいで、照準が思うようにいかない。
「ダメだ。これじゃあ、外したら最後ね。狙い打ちにされる……」
フランカーと同様に、レッシュにも焦る気持ちがあった。シングマス王と同じぐらい尊敬している、ファリスの姿が目に焼きつく。
ファリスはシングマス王の前で、体を張っていた。このまま自分がミスをすれば、シングマス王の前にファリスが殺されてしまう可能性が高い。
「ここにいるのが、お姉ちゃんだったら……」
そう、ファリスなら、きっとライフルを使って的確に的をしとめるだろう。穴から覗き込まなくても、穴から銃身の先を入れればいい。
「……待てよ？」
レッシュの脳裏に、一筋のひらめきが降臨する。レッシュは急い

でフランカーの元へと戻っていった。
「フランカーさん」
「おおっ、中の様子はどうだった？」
「まだシングマス王は生きてます。それより……」
フランカーの耳元で、先ほど閃いた作戦を説明する。だが、フランカーはあまり乗り気ではなかった。
「時間との勝負になるぞ？」
「でもわたしが思いつく限りの作戦では、これしかありません。フランカーさんはここで待機しておいてください。中で銃声またはガラスの砕ける音が聞こえたら、突入をお願いします。それと、銃弾を防げるような大きな盾を用意した方がいいかと……」
「分かった」
レッシュはすぐにその場を走り去った。目的地は城内の一室――特殊部隊の本部だった。

その２５：輝く腕輪

レジスタンスたちの食事が終わり、見張りを残した五人がレティシアの元へと集まってきた。ハンターが放った発光弾も光を失ったため、室内は月明かりで淡く照らされている。

「さて、自分がやったことを反省したか？」

尋ねられるも、シングマス王は否定するしかなかった。心当たりのない謂れを、反省などできるはずがない。

あきれつつ、レティシアはシミターを頭上へとかざした。月光に照らされた剣先が、シングマス王へと向けられる。

間にはファリスの姿があるものの、レティシアはまったく引こうとしなかった。

「こんな暗君のために、無駄に命を散らすのか？」

「シングマス王は暗君などではない」

「まだそんなことを言っているのか？　お前のような重臣が、数々の悪行を知らないとは言わせないぞ？」

「重臣だからこそ……いや、仲間だからこそ、胸を張って言える。どんな経験をしたかは知らない。だが、貴様が一方的に感情を押し付けているだけだ」

「だ、だまれ！」

シミターの剣先が揺れ、ファリスの頭上へと振り上げられる。

刹那、薄暗い室内に、青と黄色の光が点滅し始めた。レティシアの動きがピタリと止まり、光の出所を確認する。

それは、二人の特殊部隊長の腕輪から放たれていた。

「な、なんだ、貴様、何をした！」

顔をしかめるレティシアをよそに、ファリスも顔色を大きく変える――予想外の事態が起こったかのように。

「まさか、レッシュが！？　余計なことを！」

ファリスが叫んだと同時に、二人の姿が消えた。同時に室内を照

らしていた青と黄色の光も消えうせる。
「ど、どういうこと？」
今まで黙っていたシェラがこそこそと、ハンターの耳元で尋ねる。ハンターは事も無げに、ぼつりと呟いた。
「特殊部隊の緊急招集だ。これが発動すると、ディヴァイナルの作戦会議室へとワープさせられるんだ」
「ああ、なんかそんなこと、レッシュが言ってたような……ってことは、わたしたち見捨てられちゃった？」
顔を強張らせたシェラに、ハンターはすかさず頭突きを食らわせる。
「いたっ！」
「あいつらを信じろ。特殊部隊の名はダテじゃない」
「だ、だけど……」
苦痛で顔を歪めつつ、シェラが反論をしようとする。それを止めるよう、ハンターは口早に伝える。
「とりあえず、できるだけ時間を稼げ。時間がたてばたつほど、シングマス王の生存率は上がると言っていい。それはすなわち、俺たちの生存率も上がるということだ」
「わ、わかった」
ハンターの言葉には力があり、自信に満ちていた。ファリスとレッシュはもちろん、他の隊長とも知り合いなのかもしれない。
目をこすりながら、視界を取り戻そうとするレティシア一味。時間を稼ぐためには、なにか行動を起こさなければならない――その行動を考える時間も、あとわずかしかなかった。

その２６：真意

目を開けると、ファリスたち二人は作戦会議室へと呼び戻されていた。目の前にはレッシュと、軍師であるウィラーの姿がある。
「ウィラー！　なぜわたしを呼び戻した！　特殊部隊のの転送には、王の許可が必要なはずだろ！」
ベレー帽のような小さな帽子をかぶり、軍部の正装に身を包んだウィラーは、はにかみながら頭をかいている。
「いやあ、レッシュが鬼の形相で迫ってくるもんでねぇ。つい呼び戻しちゃったんだよ。なははは……」
ウィラーが問いに答えている間にも、レッシュが二人の手を拘束していたロープをナイフで切っていた。
そしてすぐさま、部屋中にひびく大声を上げた。
「話は後！　作戦の説明も移動しながらするから！　とにかくお姉ちゃんはライフルを持って！　ドノヴァンさんも代えの杖を！」
「あ、ああ……」
ドノヴァンと呼ばれた第二部隊長が、動揺しながらもレッシュから杖を受け取る。
「レッシュ！」
「お姉ちゃん！　時間がないの！」
「ダメだ！　わたしはシングマス王を守らなければならない。たとえ命に代えても……」
「かばってお姉ちゃんが死んだら、シングマス王が助かる？　その後、シェラやハンターが身代わりになったら、シングマス王は救われるの！？　違うでしょ！　目を覚ましてよ！」
ファリスの肩を掴み、何度も揺らす。
落ち着きを取り戻しつつも、ファリスはまだ納得は出来なかった。反論しようと口を開きかけるも、レッシュが先にファリスをなだめる。

「お姉ちゃんの力が必要なの。だから……お願いだから、わたしの言う通りにして！」
真剣なレッシュの眼差しに、ファリスはようやく頷いていた。
『考えてみれば、レッシュがわたしに逆らうなど、初めてだな……』
心中でぼやく。だが、それだけレッシュもシングマス王を救いたいのだ――その気持ちが強く伝わってきていた。
「じゃあ行くよ！」
「行くって、どこへだ？」
ドノヴァンの問いに、レッシュは天井を指差す。
「屋上だよ。正確には会食場の天井裏だけどね」
レッシュが走り出すと、慌てて二人も後に続いた。作戦が成功するかどうかは五分五分だった。だが、やらないわけにもいかない。
走りつつレッシュはふと思う。この間にも、シングマス王の命は消えうせているかもしれない。
否定するようにかぶりを振り、作戦を説明する。特殊部隊の名の下に、失敗するわけにはいかないのだ。

その27：作戦決行

光が落ち着いてから、辺りを見回すレティシア。二人の隊長が消えた以外で、特に変わった点は見当たらなかった。
「あいつらはどこへ消えた？」
レティシアのシミターが、シングマス王の首筋へと当てられる。部屋の中の空気が一瞬にして凍りつく。
だが、シングマス王は覚悟を決めたように、レティシアを見返していた。
「軍師のウィラーに緊急招集されたのさ。すぐにあいつらが、わたしを助けにやってくる」
「ほう、この包囲網を抜けてこれると思っているのか？」
シングマス王の周りに六人、会食場へと入る扉三つに各二人の陣形は、いまだ変わっていない。
「あいつらを舐めるなよ？　だてに特殊部隊の名を語っていない」
「そうか。じゃあせめて貴様だけでも、早いところ死んでもらわないとな」
「ちょ、ちょっと待ってくれないかなぁ。まだなんで殺されるか聞いてないんだけど」
レティシアが告げた死の宣告に、あっさりとシングマス王は態度を裏返してしまった。呆れ果てるレジスタンスの面々。
そんな中、ハンターだけが周りに気づかれないよう、息を殺して失笑していた。
「わ、わたしも詳しく知りたいな！」
突如シングマス王の背後から、シェラが声を上げる。全員の視線が一瞬にして、シェラへと集中した。
「知りたかったら、シングマス王を殺した後でゆっくり教えてやる」
「い、いや、そうですね……はい」
「な、納得するな！」

シングマス王が半泣き状態で叫ぶ。シェラが苦笑を発しながら次の手を考えていていると、
「来たな……」
ハンターがぼそりと呟く。何のことか尋ねようと、ハンターへと振り向いたその時だった。
突如レジスタンスの背後から、ガラスの砕け散る音がこだまする。
「何事だ！」
レティシアが振り向き、音の出所へと視線を向ける。後方半分の天井が、大小の破片に砕け散って、シャワーのように会食場へと降り注いでいた。
「パンドラ！　チルハ！」
レティシアが叫ぶ。扉へと張り付き見張りをしていた二人は、すでに猛ダッシュでレティシアの元へと走り出していた。
湖にでも飛び込むようにして、レティシアの足元へと転がり込む。その背後で、床へと到着したガラスの破片が、再びその体を小さく砕き、はじけ散る。
レティシアが見上げると、風穴の開いた天井の脇に、杖を持った人影があった。
暗闇でその姿ははっきりしないものの、ローブに身をまとった姿は先ほどまでここにいた特殊部隊の隊長に違いない――レティシアはそう判断した。
拳銃を持った二人に指示を出そうとすると、今度は先ほどまでパンドラとチルハが張り付いていた扉が、いとも簡単にこじ開けられる。
そこから一メートル四方は軽くある巨大なタワーシールドを、軽々と持ち上げたフランカーが、ゆっくりと歩みを進めて入ってきていた。足元に落ちているガラスの破片が、一歩ごとに音をたてる。
「くっ！」
レジスタンスの一人が、拳銃を構えてフランカーへと引き金を引く。だが、弾丸はあっさりとタワーシールドに弾き飛ばされてしま

った。
「生半可な腕じゃあ、当たらないぜ？　よく狙えよ」
せせら笑うフランカーに再度、引き金にあてた指に力を込める。だが、えもいえない衝撃が手に響き、拳銃は背後へと飛んでいってしまった。
それを皮切りにレジスタンス達の得物が、次々と弾き飛ばされていく。レティシアが原因を把握しようと目を凝らすも、薄暗いせいで出所を捉えられない。
全員がなすすべもなく戸惑う中、レティシアだけが相手の狙いに気づき始めていた。
天井を轟音と共に壊した者、盾を持って入ってくる者、見えない場所からの狙撃をする者。
作戦という名のジグソーパズルを完成させるには、あと一つピースが足りなかった。
レティシアは一人だけ、勢いよく背後を振り向く。
「ゲームオーバーだな」
勝敗を継げる言葉と共に、鼻先に向けられた銃口。その持ち主はハンターだった。
「ふぅ、助かった……」
安堵の息を漏らすシングマス五世に、シェラの縄もすでに解かれている。そのさらに後ろには、いつの間にやら現れたレッシュが、誇らしげな姿で微笑んでいた。

その２８：安堵

レッシュの作戦はこうだった。まずはレッシュがシングマス五世たちの真上に、偵察時と同様にして穴を開ける。それからドノヴァンが落雷を起こし、半分だけ天井を壊した。レッシュが穴を開けた場所とは、レジスタンスを挟んで正反対になる。

その物音とガラスのシャワーによって、予想通りレジスタンスはそちらへと注目した。同時にフランカーが室内へと飛び込んできたために、完全にレジスタンスはそちらに気を取られてしまった。

さらにドノヴァンの隣から、ファリスがライフルを使って一人一人の武器を弾き飛ばす。

スナイパーとして幾度もの仕事をこなしてきたファリスにとっても、月明かりは確かにか細い光だ。それでも、真っ暗ではない。

隊長がそれぞれの仕事をこなし、レジスタンスの意識を一方へと向けさせる。それはすなわち、反対側にいるレッシュから注意をそらすことが狙いだった。

レッシュは開けておいた穴からロープを垂らし、悠々とシングマス五世たちの側へと降り立っていた。手を縛られた三人を解き放ち、ハンターにデザートイーグルを渡す。それで全ては完了、レッシュの作戦は見事に決まったのだ。

「さて、いろいろと聞きたいことがある。なぜわたしが暗君なのか、どうして殺そうとしたのか。そして、お前達の背後にいる黒幕は誰なのか。ゆっくりと聞かせてもらおう」

フランカーがすでに呼んでいたのか、衛兵達がレジスタンスの面々を連れて、部屋から出て行く。それと入れ替わるように、ファリスが部屋の中へと飛び込んできた。

「シングマス王。よくご無事で……」

シングマス五世の前で、ファリスが膝をつく。

「ああ、助かったよファリス」

「礼ならレッシュに言ってください。レッシュが救出作戦を一人で考えたんです」
「そうか。ありがとうレッシュ」
「もったいないお言葉ですよ。わたしはお姉ちゃんを救いたかっただけで、シングマス王はどうでもよかったんですから」
「そ、そりゃないだろ、レッシュ……」
シングマス王の顔が青ざめると、とたんに全員の口から笑みがこぼれる。
「冗談ですよ。お姉ちゃんを救っただけでいいなら、お姉ちゃんを呼び戻した時点で見捨ててます」
「そりゃそうだな」
相槌をうつハンターに、全員の顔がほころぶ。ようやく確保できた自身の無事から、自然と漏れた笑顔だった。

その29：牢屋にて

長かった夜が明ける。だが、当然のごとく受験者と特殊部隊の隊員との最終試験は実施されなかった。

ハンターとシェラを除いたメンバーは、全員牢屋の中へと入っている。そして二人は特殊部隊への編入を望んでいなかった。

その頃、牢屋の中でレティシアは一人、冷たい石畳に腰を下ろしていた。視界には壁と鉄格子ぐらいしかなく、時間が止まっているかのように、その光景は不変だった。

ぼんやりと床を見つめながら、頭の中を巡る思考。それは今後の自分がどうなるかではなかった。

集落に残された娘や、同胞の子息……彼らの運命は、もはや風前の灯だ。『赤斑病』を治すための資金はなく、シングマス王の暗殺にも失敗した。

全ては慢心が原因だった。会食場を制圧した時点で、シングマス王の首をはねていれば、何の問題もなかったのだ。

苦しみながら死んでいく子どもたち――それが、レティシアの脳裏を征服している思考の正体だった。皆が皆、レティシアに罵詈雑言を並べながら、次々に倒れていく。

その中には、レティシアの愛娘もいた。

「熱いよ、痛いよ、お母さん……」

「くっ！」

聞こえてくる愛娘の声を振り切るよう、耳を塞いで首を左右に振る。何度も、何度も。

それでも声は消えず、赤い斑点が体中に広がっている愛娘が、一歩、また一歩とレティシアの元へと近づいてくる。

「お母さん、助けて……」

「うあああああ！」

悲鳴を上げつつ、拳を何度も壁へと叩きつける。

しばらくして、ようやくレティシアは我に返った。傷ついた右の拳が、思い出したかのように断続的な痛みを発し始める。
いつの間にか目から流れていた涙を、振り切るように拭う。すると、遠くから足音が聞こえてきた。交互に聞こえる二種類の足音――どうやら二人いるらしい。
その足音は少しずつレティシアの牢屋に近づいてくると、目の前で動きを止めた。
「気分はどうだ？」
レティシアが顔を上げると、そこにはシングマス五世がいた。その横には、救護班で仕事をしていた女性――マスカーレイドのアクサが、にっこりと微笑んでいる。
「最悪だ。貴様の顔など見たくなかった」
「そう邪険にしないでくれ、レティシア。いいお知らせがあるんだ」
「いいお知らせだと？」
「すべては君の仲間のパンドラから聞いたよ。君は自分の故郷のため、はるばるディヴァイナルまでやってきた。わたしを殺せば、故郷を赤斑病から開放してやれる……そう言われてね」
そこまで言うと、アクサをレティシアの前へと促す。アクサはシングマス五世の一歩前へと進み、続きを語り始めた。
「赤斑病は、確かに不治の病でした。ですが今ではもう、完治させるための特効薬が開発されています。赤斑病で死ぬ患者はいないと言っても、過言ではありません」
「それは金持ちの言い分だ。貴様らのような王族や医者などのな！わたしたちのように夫を亡くして、生きていくのがやっとの人間に、一人につき百万バッツなど準備できるわけがないだろう！」
顔を赤らめたレティシアが、食いつくように反論する。もし鉄格子が間になかったら、間違いなくアクサに掴みかかっていただろう。
だが、アクサは脅えるようす一つ見せず、小さく首を振った。
「赤斑病の特効薬に、百万バッツなんて大金を請求する医者はいません」

「な、なんだと？」
「もしわたしが赤斑病患者の治療を引き受けたなら、千バッツも請求すればもらいすぎといってもいいぐらいです」
　唖然としてアクサの顔を見つめるレティシアに、さらに続ける。
「そもそも赤斑病の病原菌はすでに死滅したといわれています。その証拠に、ここ数十年、赤斑病の患者が出たという記録は残っていないのです。わたしたち医者からすれば、赤斑病に感染した患者がいる時点で、すでに異質なんですよ」
「そ、そんなこと、あの医者は一言も言わなかったぞ……」
「ええ、ですからその医者を名乗った男は、サンプルとしてどこかに保管されていた赤斑病の病原菌を手に入れ、レティシアさんの町へとばら撒いたと考えられます」
「な、何のために……」
「君たちを利用するためさ」
　黙ってアクサの話を聞いていたシングマス五世が、すかさず口を挟む。
「わたしが死んだほうが、都合のいい人間が王都の中にいるらしい。残念ながらそれは事実のようだ。そしてわたしを暗殺するための人材を探していたところ、君たちのような集団の存在を知ったんだ。夫を失い、王都に対して不満を抱えていたものもいただろう。その悔恨と入隊試験を利用して、わたしを亡き者にしようとしたのだ」
　一段と目つきをきつくして、レティシアが石畳にコブシを叩きつける。
「わたしたちは、利用されていたのか……」
「簡単に言えば、そういうことだ」
　噛んでいた唇から、赤い液体が口元からこぼれ落ちる。利用された悔しさとふがいない自分に、苛立ちが隠せなかった。
「それではわたしは先に、失礼させていただきます」
　一通り説明を終えて、アクサが告げる。シングマス五世にも異論はなさそうだった。

「ああ、明日には出発だ。頼んだぞ」
「はい、必ずや吉報をお届けします」
シングマス五世に軽く会釈すると、アクサは来た道を戻っていく。付近にはシングマス五世とレティシアだけが残されていた。
「どこへ……」
小声でぼやいたのを、シングマス五世は聞き逃さなかった。表情を緩めつつ、レティシアの疑問に答える。
「聞いただろ？　赤斑病は治らない病気じゃないんだ」
「ま、まさか！」
「費用はディヴァイナルで負担させてもらう。国民の安全を守るのも、王の仕事の一つだ。無論、君たちの村への援助もさせてもらう。困ったときはいつでも言ってくれ」
「すまない、本当に……ありがとう」
頭を下げるレティシアの前にしゃがみこみ、優しく微笑みかける。自分を殺そうとしていた人を目の前にして、出来る表情ではない。
シングマス王の器量に、レティシアが気づき始めた瞬間だった。
「それはさておき、一つ提案があるんだが……」
「提案？　ですか？」
もうレティシアの目からは、憎しみが消えうせていた。それは喋る言葉一つをとっても理解できる。
「このまま牢屋に入れられているのも、本意ではあるまい？　今日開催予定だった本試験は、明日に延期となっている」
「わたし達に参加しろと、おっしゃるのですか？」
「予選を抜けた者には、その権利がある。もちろん、本気で特殊部隊への入隊を考えているなら――だが。任務以外では自分たちの村で過ごせる上、給料も悪くない。こちらとしても腕のたつ隊員が増えるのを望んでいるからこそ、毎年試験を行っているんだ。両者にとって悪い話ではないと思うぞ？」
「しかし、わたしは一度あなたを殺そうと……」
「城の中で起こったことは、城の中の人間しか知らん。そして今日

の試験も、わたしの急病を名目とした延期となっている。あとは君たちの決断――それだけだ」
「……もったいないお言葉でございます」
頭を下げて、レティシアは涙を流した。ただただ、むせび泣いた。一度は恨んだ慢心に、少なからず感謝していた。
そして、一度は殺そうとした王のために、命を賭けることを誓った瞬間だった。
その後の試験で、フィメイル＝レジスタンスのメンバー十二人のうち、レティシアを含めた八人が見事に入隊を果たした。彼女らはその後、長く特殊部隊として、王都に勤めることになる。
その裏側で、レッシュの部下四人全員が、レジスタンスの面々にやられたという事実も隠されていた。これで少なくとも三年は、レッシュの隊長生活も続くだろう。
それをレッシュが嘆いていたのは、言うまでもない。

その３０：別れ

繰り越された入隊試験の日。試験日和とはいえない曇り空ではあったものの、ある意味では戦いやすい気候だった。
ようやく小鳥のさえずりが聞こえてきた早朝、城の中に足音を殺して歩く人影があった。一階の窓の一つに手をかけ、ゆっくりと押し開ける。
「どこに行くんだ、ハンター」
ビクッと体を震わせた人影は、おもむろに振り向く。そこには壁に寄りかかりつつ、腕を組んでいるファリスの姿があった。
「なんだ、ファリスか」
「俺もいるけどな」
ファリスの背後から、シングマス王が姿を現す。ハンターは呆れつつも、窓を開ける動きを止めた。
「ほらな。言ったとおりだろ？」
勝ち誇るシングマス王が、右手を差し出す。そこにファリスは一万バッツ札を叩きつけた。
「おいおい、王様ともあろうものが賭博か？」
「まあまあ、硬いことは言うな。俺達の仲だろう？」
「仲というよりも、腐れ縁って気がするな」
「腐れ縁ならなおのこと、ここに残って試験を受ければいいだろ？」
真剣な眼差しで、ファリスが告げる。だがハンターはそれを茶化すように、鼻で笑った。
「悪いな。もう特殊部隊に未練はないんだ」
ファリスは無言でハンターの傍まで行くと、遮るように窓をふさぐ。心なしか、いつもよりも瞳が輝いてみえた。
「あの時、わたしがどんなに苦労したのか、知ってるのか？」
「さあな、辞めた後のことだ。知りたくもないさ」
「隊長も、レッシュも、ユリスも、バウンティも――だれもいない。

シーバス部隊の中で一人残ってしまった、わたしの苦しみが……」
愚痴を遮るように、ファリスの口を塞ぐ。あっけに取られるファリスに、ハンターは照れくさそうに微笑んでみせた。
「会食場でまた、全員そろってたじゃないか」
「会食場で？」
「レッシュにファリスに俺、そしてバウンティもいただろ？　それからバウンティの使っていた拳銃を思い出せ」
考える必要などなかった。ハンターの言っている意味が、一瞬で理解できる。
後ろを振り返ると、シングマス王が会食場で使っていた拳銃を、大げさに構えてみせていた。
微笑む二人に挟まれ、ファリスからも自然と笑みがこぼれる。
「くさいセリフだな」
「悪かったな。俺だって言いたくなかった」
「いや、その方がハンターらしい気がする」
ファリスの体を軽く押して、窓の前を空ける。それから窓のふちへと、足をかけた。
「それじゃあな」
「ハンター、忘れ物だ」
振り向くと、シングマス王がハンターの目の前へと、封筒が差し出していた。
「今回の報酬だ」
「やけに薄いな。もっと多かったはずだが……」
「俺とファリスが昔、貸していたお金を天引きしておいた。やっと返してもらえてホッとしている」
顔を引きつらせるハンターに、二人は必死に笑いをこらえているようだ。特にファリスは体を大きく震わせ、ハンターと目が合わないようそっぽを向いている。
「あのなぁ……」
「今回だけは無利子にしておいたんだ。文句があるなら利子も……」

シングマス王がハンターの持っていた封筒へと、手を伸ばそうとする。慌ててハンターは薄い封筒を懐へと入れた。
「分かった、分かった。ありがたくもらっておくよ」
受け取った後に、少し考えてからシングマス王に告げる。
「シェラの報酬もあるのか？」
「もちろんだ」
「あまり役に立ってなかった気がするが……そうだ、こういうのはどうだ？」
ひそひそと耳元で告げる。ハンターの妙案にシングマス王は、喜び勇んで手を打った。
「それはいい！　ちょうど人手が足りなかったし、シェラなら安心して任せられる」
「それじゃあな、しっかりこき使ってやれ」
「ああ。ハンターのほうも頼んだぞ……またな」
シングマス王の横で、ファリスが遠慮がちに手を振る。
「またがあるかどうかは微妙だがな」
「あるさ。シーバス部隊もそれを望んでいるはずだ」
二人の期待する目を振り払うように、ハンターは窓から外へと飛び出していく。
「また、皆が揃う日が来る……きっとな」
呟いたシングマス王に、ファリスが無言で頷く。ハンターの姿が見えなくなるまで、二人はその場を離れなかった。

目を覚ましたシェラは、窓の外から城下を見下ろした。どうやら街全体は、今日に延期となった試験で賑わっているようだ。
頬を撫でる冷たい風に身を晒していると、入り口からノックの音が聞こえてくる。
「どうぞ」
窓を閉めながら、応える。ノックの主はレッシュだった。
「さっ、今日が本番なんだからね。気合入れなきゃダメだよ？」

「ああ、それなんだけどさ……」
バツが悪そうに、頭に手をやる。呆れたようすで、レッシュが首を振った。
「やれやれ、やっぱり棄権するつもりなのね」
「……ごめん」
「まあ、最初から腕試しと依頼が前提だしね。別にいいわよ。予想していなかったといえば嘘になるし……」
シェラが頭を下げて、荷物をまとめ始める。といっても、すでに戦闘態勢の格好なので、小さなナップサックを背負うだけだ。
「それにしても、特殊部隊になりたいって人は山ほどいるのにね……」
「自由のない生活は嫌いなのよ」
「特殊部隊はそれなりに自由の多い職業だと思うけどな……それに、オートエーガンでの仕事に自由があるの？」
「そう言われると困るけど……なにかあった時にはすぐに飛び出していけると思う」
「なにかって？」
「それは……なにかよ」
目をそらし、上ずった声でシェラが気まずそうに答える。レッシュは口をへの字に曲げて、それ以上なにも聞かずにドアの前から退いた。
レッシュの前を通ろうとしたシェラの前に、また新たな人影が現れる。ファリスだった。
「なんだ、もうお帰りか？」
「どうも、お世話になりました」
「そうか、残念だな。シェラならきっと立派な特殊部隊員になって、ゆくゆくは隊長にもなれる器だと思うんだが……」
言いながら、懐から封筒を取り出す。それはハンターに渡したものと同じものだった。ただし、ハンターに渡したものよりも、中身はぎっしり詰まっている。

「これは？」
「報酬だ」
「あっ、すっかり忘れてた……」
苦笑いを浮かべながら、シェラが受け取る。それを見てファリスはしれやったりと微笑んでいた。
「そうか、引き受けてくれるか」
「えっ？」
封筒を手に持ちながら、口をポカンと開ける。かまわずファリスは続けた。
「レティシアたちの集落へ、アクサ先生を連れて行く護衛の任務だ。引き受けてくれるんだろ？」
「ちょ、ちょっと待って。これはシングマス王の護衛の報酬じゃ……」
「そんなこと、一言も言ってないが……それに、シングマス王の護衛で、シェラは役に立ってくれたか？」
「ぐっ……」
一歩後ずさるシェラの横で、レッシュが息を殺して笑っていた。
確かに言われたとおり、シェラはなにも出来なかった。最初の二人の殺し屋を止めたのは、シングマス王とハンターであり、シェラはただ呆然と成り行きを見守っていただけだ。
それはフィメイル＝レジスタンスを相手にしていたときも同じで、武器を没収されたまま、なすすべもなかった。ハンターのように時間稼ぎをしたわけでもなく、部隊長達のシングマス王奪還の作戦にも参加していない。
「だ、だけど……」
「大丈夫だ。その分の報酬もちゃんと用意してある。だが、もう一つぐらい依頼を受けてくれても、ばちは当たらないと思うが？」
「でも、オートエーガンの仕事もあるし、そろそろ戻らないと……」
「一週間の謹慎なんだろ？　明後日までに帰れば大丈夫だ。それに遅れても、ハンターがうまいこと言っておいてやるらしいぞ」

「ハンターが？」
「そうだ。これからわたし達は、試験のためにディヴァイナルから離れられない。信頼できて屈強な護衛といえば、シェラぐらいしか思い浮かばないから、頼んでみたんだが……」
褒め言葉を受けて、シェラがはにかみ始める。元々頼まれごとに弱いシェラが、そこまで言われては断れるはずもなかった。
「分かったわ。確かにこのまま報酬をもらうってのも、悪い気がするし……」
「ありがとう。恩に着る。レッシュ、案内してやってくれ」
「うん、こっちだよ」
レッシュの案内で、シェラは集合場所へと向かう。同じ装飾の鎧を着込んだ兵士が数人と、アクサが馬車の周りを囲んでいる。
「シェラが隊長だから、きちんと指示をしてあげてね」
「た、隊長？　わたしが？」
「シェラなら大丈夫。わたしとお姉ちゃんが保障するよ」
「なんだかうまいこと乗せられて、利用されてる気がしてきた……」
嘆くシェラの肩に手を乗せて、背後から来たアクサも続ける。
「大丈夫よ。わたしも保証するわ。わたしも知り合いがいたほうが、なにかと気が楽だし」
「それもそうですね。んじゃ、早いところ行きましょうか」
アクサとシェラ、それに数人の兵士が乗った馬車へと乗り込むと、御者が馬車を発進させる。その姿が見えなくなるまで、レッシュは手を振って見送っていた……含み笑いを浮かべつつ。
シェラは隊長としての任務と報酬を考えつつ、優雅に馬車の旅を楽しんでいた。その途中、目的地まで片道で一週間かかるという事実が明らかになるまでは。
「そ、それじゃあ明後日までに帰るなんて、絶対に無理じゃない！」
「そうよ？　シェラ、聞いてなかったの？」
「うううぅ、あの二人にまんまとはめられたわ……」
打ちひしがれるシェラをあざ笑うかのように、馬車はスピードを

上げていく。目的地へを目指し、ぐんぐんと。
こうなってしまっては、あとはハンター頼みだ。でないと、今度は謹慎どころかクビになってしまいかねない。
どうかうまいこと言って、ごまかしてくれていますように――報酬よりも任務成功よりも、シェラはそれを願っていた。

その３０：別れ（後書き）

どうも、水鏡樹です。
マスカーレイドに異常なし！？第７話　特殊部隊入隊試験　いかがだったでしょうか？
今回は少しハンターやレッシュなどの過去を出したかったため、少し長くなってしまいました。
といっても、第１話とおなじぐらいなんですけど。ちょっと多くの部分に分けすぎた気もします。
この作品を読んで、楽しい時間を過ごせてもらえたのなら、作者にとってこれ以上嬉しいことはありません。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。
第８話の構想はできていますが、まだ執筆にはいたっていないので、少し遅れるかもしれませんが、気長に待ってもらえれば幸いです。
最後にシーバス部隊について。つづりはＳＹＢＵＳです。これでなぜシーバス部隊と呼ばれていたか、分かる人もいると思います。
と、同時に、矛盾にも気づくと思いますが、それは今後の作品の中で解明していきたいです。
それでは、最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1056b/

マスカーレイドに異常なし！？　第７話　特殊部隊入隊試験

2010年10月8日15時51分発行